慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	根本通明先生蔵書紀略 : 根本文庫研究之二
Sub Title	The Second Report of Nemoto Bunko Studies : A Description of the Nemoto Tsumei Library
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2004
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.39 (2004.) ,p.91- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20040000-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

根本通明先生蔵書紀略――根本文庫研究之二――

高橋　智

まえがき（続）

前号第三十八輯に引き続き根本通明博士遺書の略解題をここに誌す。博士の人と学問については前号で簡単に紹介したが、ここで再度、繰り返すならば次のようである。初めの名を周助と言った。諱は通明で、号は羽嶽。秋田、仙北郡の刈和野に文政六年（一八二三）十二月十四日生まれる。秋田藩の明徳館に入り、教官となる。明治初には戊辰戦争に従軍。奥羽越列藩同盟で、東北と薩長との溝が深まる中、秋田藩の動向が曖昧であったのを、勤王派に統一させるのに尽力、『易』の思想を諄々と藩公佐竹義堯に説き、勤王一道から、四面楚歌となっても恐れる事はないと奮迅し、愛刀を所持して仙台・庄内等の東北諸藩を敵に回し、勅命を奉じる新政府軍に荷担した功績は、藩政を動かした並々ならぬ博士の武士道と儒学の賜であった。明治六年、上京。大蔵省の編集となり、大隈重信に認められ、また、中村敬宇、島田重礼等漢学者と交わり、斯文会発足に参加。明治天皇に『易』を講じ、家塾を開いて子弟を育成、明治二十八年帝国大学に教鞭を執り、同三十八年八十四歳に至るまで教授を務め、その間、学士院会員となり、文学博士を授与される。また、勲四等瑞宝章を受章。明治三十九年十月三日卒。享年八十有五。著に『周易象義辯正』『論

語講義』『詩経講義』等がある。「書剣自得」の印を持ち儒書と古刀を自らの分身とした。今、その肖像を掲載できないのを遺憾とするが、その風貌は、顔眞卿の書体を学ぶ筆跡とともに、迫り来るものがあり、漢学史のみではなく、人と漢文、書物と学問という、日本人がけして忘れてはならないテーマを語りかけているかのようである。蔵書は博士の学問をよく表しており、特色を反映する分類に仕立て、通覧できるようにした。蔵書紀略は学者の平生を垣間見る最も有力な手段であることを証したつもりである。

目次

第一編　目録編（前号参照）

第二編　解説編

凡例

一、易学　三十九部二百八冊一帖……九四

二、論語・四書類　二十四部九十四冊一帖……一〇七

三、詩経類　十七部百六十九冊……一一八

四、経書類　六十部三百二十九冊一帖……一二三

五、史書類　二十八部三百八十九冊……一三八

六、老荘類　十二部四十八冊……一四六

七、諸家類　十四部百十八冊……一四九

八、集部書　十二部百二十九冊……一五三

九、古活字版類　八部七十二冊……一五七

十、叢書類（経義類）　十二部四百七十三冊……一六五

十一、叢書類（彙編）　七部二百二十六冊……一七四

十二、皆川淇園　著作　十九部四十四冊……一七八

十三、篤胤関係　四部八冊……一八三

十四、自著類　四部四冊……一八四

十五、刀剣類　十三部四十五冊……一八五

十六、碑銘類　四部八帖……一八八

十七、釈奠孔子類　九部十七冊一帖……一八八

十八、雑類　十二部五十四冊……一九〇

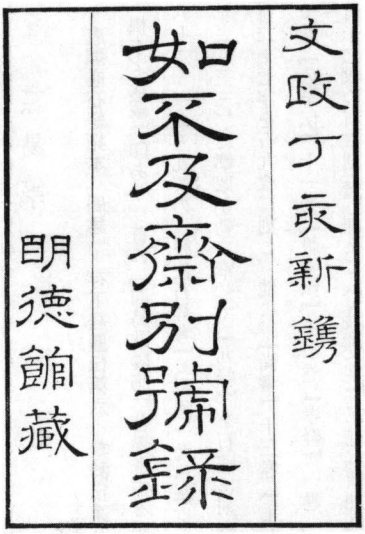
以上三百一部二千四百三十七冊十二帖

第二編　解説編

凡例

一、この解説は第一編「目録編」に著録した根本博士の全蔵書に簡明な説明を施したものである。従って、各蔵書の冊数と函架番号は省略してあるので、第一編を併せ参照されたい。解説の体裁は一定しないが、博士の学問を概ね把握できるように努めた。尤も、博士の学問の真髄は、蔵書に加えられた夥しい書き入れに一端を伺うことができるものであるが、その逐一を紹介できないのは残念である。秋田県立図書館がこれを永久に保存し、後世にその原姿を伝えることを切に願うものである。

二、配列は「目録編」に従う。易学を中心とした経書は博士の蔵書の核を成すもので、老荘、刀剣、釈奠等の諸書これに継ぐことは、第一編凡例に述べる通りである。



八－十八参照

明徳館蔵版本（十八－八参照）

一、易学

一、唐開成石経拓本『周易』存下経豊伝第六―繫辞伝第八（末缺）

「根本／氏蔵」印あり。首に「周易歐陽詢」と墨書するが、根本氏の手ではない。中華民国の政治家・張国淦（ちょうこくかん・一八七二～一九五九）の『歴代石経考』（民国一九年燕京大学国学研究所）所収「唐石経考」に拠れば、唐石経は、唐の文宗大和七年（八三三）に鄭覃が勅に奉じて『九経』を石壁に刻み、開成二年（八三七）に完成したものである。『周易』は九巻二万四千四百二十七字を石九枚に刻し、他に、『尚書』十三巻『毛詩』二十巻『周礼』十二巻『儀礼』十七巻『礼記』二十巻『春秋左氏伝』三十巻『公羊伝』十一巻『穀梁伝』十二巻『孝経』一巻『論語』十巻『爾雅』三巻、計百五十九巻、六十一万三千一百三十五字を二百十七枚の石に刻み、加えて『五経文字』三巻『新加九経字様』一巻を九石に刻した。総計、二百二十七石、六十五万二百五十二字の石碑となり、都・長安の務本坊国子監太学講論堂両廊に立てられた。実際は『十二経』を数え、十二経を九経と称したとも言われ、九経から続刻したとも言われる。字体は真書、標題のみ隷書、毎石の行数は不等、行八列、各列十～十一字。『周易』は魏の王弼・晋の韓康伯注本を用いる。『尚書』は漢の孔安国注本、『毛詩』『周礼』『儀礼』『礼記』は漢の鄭玄注本（『礼記』首月令篇は李林甫等奉勅注本）、『春秋左氏伝』は晋の杜預注本、『公羊伝』は漢の何休注本、『穀梁伝』は晋の范寧注本、『孝経』は玄宗注本、『論語』は魏の何晏注本、『爾雅』は晋の郭璞注本をそれぞれ用い、いずれも注は削去されている。『五経文字』は唐の張参、『新加九経字様』は、唐の唐玄度がそれぞれ定めたものである。清の康熙年間、賈漢復が陝西巡撫の時に『孟子』七巻（宋・朱熹注本）を加え刻んだ。民国十六年（一九二七）張宗昌が菿忍堂にこの石経を模写して出版した（一九九七年中華書局の影印本がある）。日本でも天保年間、松崎慊堂が能書家、小島知足の模写に係る開成石経を校訂出版した。その精美は菿忍堂本を遙かに上回る。拓本は、明代の地震による石碑倒壊等から、修復を経た清乾隆時代以降のものが遺るが、全巻揃って現存する例は少ない。静嘉堂文庫には、松崎慊堂手沢の拓本が、ほぼ全巻現存し、斯道文庫には『毛詩』巻十九、『礼記』巻十四等が、永青文庫には『孟

子』が所蔵される等の例を挙げ得るのみである。

二、周易卜子夏伝十一巻　周卜商撰　小林龍山校　天明三年序刊（江戸、慶元堂和泉屋庄次郎）

孔子の弟子、卜商子夏（姓は卜・名は商・字は子夏・BC五〇七？～BC四二〇？）による『周易』の注釈書。しかし、中国最古の書目『漢書藝文志』には、本書を載せず、そもそも卜子夏の注釈書は存在しなかったとするのが定説である。『隋書経籍志』が本書を著録しているのは、『子夏易伝』と言う名前の書物から、著者を卜子夏と誤解したのであって、『子夏易伝』は、漢の韓嬰（字は子夏）の作であるとされる。また、『漢書藝文志』の「韓嬰易二篇」は「亡」とあって、韓嬰の『易伝』も早くからうしなわれ、偽本が伝わっていた。南宋の宮中蔵書目録『崇文総目』には、本書を著録し、著者は未詳とし卜子夏の作ではない、とする。以上から、清朝の総合目録『四庫全書総目』では、「旧本題卜子夏撰」とする。顧実『漢書藝文志講疏』も、本書を宋以後の人の偽作であるとし、韓嬰の『易伝』とは同一のものではないと説く。中国では、清の康熙年間（一七世紀後半）編纂の『通志堂経解』に『子夏易伝十一巻』を収め、乾隆年間（一八世紀後半）編纂の『四庫全書』にも収められた。江戸時代後期の大儒・片山兼山の弟子小林龍山が天明三年（一七八三）に本書を校訂、出版したのが本版である。恐らくは、通志堂経解本によったものと思われる。清朝の学者が『四庫全書』を校訂しているのと時を同じくして本書を選び出版しているのは、恐るべき見識と言わねばならない。初印本は江戸の西村源六・須原屋茂兵衛、大阪の藤屋弥兵衛、の三書肆による六冊本である。本版は後印で、この三書肆の奥付を遺し、江戸の慶元堂が求版、販売したものである。刻字には篆書を用いる箇所もあり、一風変わった趣向が見られる。

三、周易乾鑿度二巻　漢鄭玄注

四、鄭氏周易三巻　漢鄭玄注　元王応麟輯　清惠棟補

五、経典釈文周易音義　唐陸徳明撰

六、又

以上、清乾隆間雅雨堂刊本　十一―五（叢書類・雅雨堂蔵書の項を参照）

七、周易口訣義六巻　唐史徴撰　清刊　覆刻清嘉慶間孫星衍岱南閣叢書本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。単辺無界七行十八字。根本博士の朱点が少々ある。清朝後期の校勘学者・孫星衍（一七五三～一八一八）が校訂した岱南閣叢書の一。この叢書は『中国叢書綜録』によると、乾隆嘉慶間に十六種刻した後に、嘉慶三年（一七九八）更に四種を増刻している。本書はその増刻の一種である。『四庫全書総目』に言う。唐以前の『周易』の解説書は、二、の子夏伝が偽作であり、四、の鄭玄注や陸績・干宝注も部分的に遺るのみであり、要は、京房・王弼・孔穎達・李鼎祚と史徴の五家を数えるだけである、と。これらの注は、十―一（叢書類・十三経注疏）や十一―三・四（叢書類・漢魏叢書、玉函山房輯佚書・雅雨堂蔵書）に見ることができる。本書は乾隆年間編纂の『四庫全書』にも収載されたが、それは明時代の一大叢書『永楽大典』に拠っているもので、孫氏の校本には及ばない。史徴が何時頃の人なのかは不詳で、『宋史藝文志』は史文徴とするなど定かではない。

八、周易義伝合訂十五巻　宋程頤撰　宋朱熹本義　清張道緒音釈　清嘉慶十六年刊

九、又　残欠

版式は左右双辺無界八行二十二字（匡郭内縦十八・八横十二・四糎）単黒魚尾、下象鼻に「人鏡軒蔵版」とある。句点を刻す。封面に「嘉慶辛未」とある。ともに根本博士の書き入れがあり、（八）には「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記が、（九）には「根本／氏蔵」印を捺す。本書は宋の程頤（伊川・一〇三三～一一〇七）の『易伝』と朱熹（一一三〇～一二〇〇）の『周易本義』を一書にまとめたものである。二書はいずれも宋刊本が中国国家図書館（北京）に伝わるので、伝来は古い。しかし、古い型

のテキストは清朝以後近代に到るまで長く学者の目に触れることが無く、『四庫全書』には『易伝四巻』『原本周易本義十二巻・附重刻周易本義四巻』を収載しているが、宋刊本に拠ったものではなく、四庫館臣の苦労が伺える。今日一般に見る二書の祖型は、元末頃（十四世紀）に、二書を併せ『周易程朱伝義』として世に流布したものである。『四庫全書総目』に清の考証学者・顧炎武の『日知録』を引いて言う。「洪武の初（十四世紀後半）、五経を天下の学校に頒布した時に、『易経』は程・朱の注釈を用いた。また、永楽年間（十五世紀初）に『五経大全』を編纂した時に、朱熹の本義を分断して、程氏の注釈の後ろに附したため、朱子の定めた姿が混乱した。」すでに、宋の董楷が『周易程朱先生伝義附録』を編纂して二書を再編した時にこうした混乱は始まっていた。いずれにせよ、明の『五経大全』は甚だ流行し、我が国の近世以降、儒者の易学はこの書によることが専らで、江戸時代の最も一般的な教科書であった『首書五経集注』（松永昌易訓点）はこの大全本に拠るものである。また、江戸時代の各種訓点本『五経』も概ね程・朱の易伝義をもととしている。

一〇、誠斎先生易伝二十巻　宋楊万里撰　張日晸校　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。宋の宣和六年（一一二四）に生まれ、開禧三年（一二〇六）に没した詩人、楊万里の易注釈書。誠斎先生は楊氏の呼称。吉水（江西省）の人。字は廷秀。諡は文節。陸游・范成大等と並び称される。その詩集、『誠斎先生南海集』八巻、『誠斎集』百三十三巻の宋刊本は、古くよりわが国に伝えられ、宮内庁の書陵部に現蔵し、日本との縁が深い。本書の宋版は北京の国家図書館に所蔵される（瞿氏鉄琴銅剣楼旧蔵）。『四庫全書』にも収載されている。『四庫全書総目提要』によれば、宋代、程頤の易伝と併せ出版していたが、元代の儒者はこれを良しとせず、誠斎の易伝を採用しなかったが、結局本書が滅びることはなかった。「京師大学堂」の蔵書印記がある。この学堂は清光緒二十四年（一八九八）創立の中国最古の大学で、戊戌の変法による政策の一端である。一九一二年、北京大学となった。

一一、易小伝六巻　宋沈該撰　清刊（通志堂経解本）

「根本／氏蔵」印記あり。清の納蘭成徳が編集した経書の解説叢書『通志堂経解』に収める一書。『通志堂経解』は主に宋・元時代の学者の解説書を集めた叢書で、所収のものは単行本では見ることのできない書が多い。清康熙一九年（一六八〇）に初版が出され、同治一二年（一八七三）に広東で再版された。根本博士は本叢書を数種所蔵していた（いずれも初版の如し）が、ここでは叢書としてはまとめなかった。沈該は浙江帰安の人。南宋初、紹興年間（一二世紀前半）の礼部侍郎、本書を奉り、皇帝（高宗）の賞賛を得た。『四庫全書総目』には、南宋以後の『易』の解釈が程氏の哲学を主としているのに対して、本来の占いの『易』解釈に努めている点を評価している。根本博士は宋人の易学書には批点の書き入れがない。

一二、漢上易伝十一巻漢上易卦図三巻　宋朱震撰　清刊（通志堂経解本）

29／101『易纂言』、29／136『書纂言』、29／137『毛詩集解』と同じ蔵書印記（蔵書者不詳）を有する。朱震は湖北省荊門の人。北宋の政和年間（一二世紀初）の進士で南宋では翰林学士となる。「漢上」とは居所の名。『四庫全書総目提要』では『漢上易集伝』とする。また、同書によれば、朱震の説には得失があり、後世の学者の評価は分かれるが、総じて廃するべからざるものがある。

一三、易纂言十二巻　元呉澄撰　清刊（通志堂経解本）

呉澄（一二四七～一三三一）は、江西省崇仁の人。十四世紀前半の至大～泰定年間に活躍し、翰林学士・経筵講官などを勤めた。弟子・著作も多く、一代の経学の大宗と言われた。宋の呂祖謙の「易」を元にして、宋以来の諸家の注を引用したのが本書である。『四庫全書総目』は、その解釈を「詞簡理明、融貫旧聞」として元人の「易」解釈書の巨擘であると評している。

十四、周易本義通釈十卷　元胡炳文撰　亨和二年刊文政六年印（江戸、堀野屋儀助等）官版

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。奥付に「文政六年癸未十月　御学問所御蔵版」とあり。幕府の昌平校が通志堂経解本を覆刻したもので、岡田屋嘉七・前川六左衛門・堀野屋儀助の三書肆が取り扱い書店。昌平校は易学について、他に、通志堂経解本「朱文公易説」（宋　朱鑑）「周易本義附録纂注」（元　胡一桂）「易学啓蒙通釈」（宋　胡方平）を覆刻している。胡炳文（一二二五〇～一三三三）は江西省靖安の人。「元史」巻一八九に伝がある。胡方平・一桂の親子とは同郡の胡氏。炳文の父は斗元であり、『四庫全書総目』に炳文の父を一桂とするのは何故であろうか。いずれにもせよ、胡氏の易学は当時の主流で、朱熹の学説に基づくものである。元代は書院（学校）制度の流盛に伴って、書院における講学が学問の主要な形態をなし、こうした解説書は、講義の集成としての意味を持つ。程・朱の易学を知るに有益な書であって、根本博士の訓点・説の書き入れを多く有する。

十五、（新刻）来瞿唐先生易註十五卷　明来知徳撰　高翁映校　清刊

「根本／氏蔵」印記あり。毎半葉九行行二十二字、匡郭縦十八・七糎横十二・五糎。根本博士の書き入れが少々ある。来氏は四川梁山の人。嘉靖三十一年（一五五二）の挙人で、本書は隆慶四年（一五七〇）から万暦二十六年（一五九八）にかけて書かれたものである。自序によれば、明の「五経大全」は義理の集成に長じているが、易の原義たる象についてかえって疎漏となってしまうことを恨みに思い、孔子の原点に帰ることを旨とする。根本博士の意を得た書であったかも知れない。図も多く附して解りやすい註解となっている。図も含めて十六巻とすることもある。清代の翻刻本が多く、版種の比較検討は難しい。

十六、古周易訂詁十六卷　明何楷撰　清文林堂刊

「根本／氏蔵」「根本／通明」（陰刻）「羽／嶽」印記あり。本書には、根本博士の書き入れが朱墨両筆でビッシリとある。博士の易学を最もよく見得る一本である。また、根本博士以前の書き入れも存し、あるいは清人の手か。表紙は日本の後補茶色表紙で、

「斉藤氏／蔵書記」の印もある。何楷は福建晋江の人。天啓五年（一六二五）の進士。本書に崇禎六年（一六三三）の自序がある。『四庫全書総目』では、「漢・晋以来の旧説も採用し、臆断や附会をなさず、豊富な注解を備えている」と評価する。まさに、根本博士の最も評価する一本でもあった。江戸時代の儒者は、師説を守る中世風の学風と学派に連なる近世的意識が混在していた。明治の漢学者は、学派の読書にとらわれず、「短を捨てて長を取る」姿勢に終始しなかった。宋儒・明儒・清儒を問わず、解釈の原点を求めた。博士の読書はそれをよく物語っている。本版には乾隆十七年（一七五二）の単徳謨の序、同十六年郭文燄の重刊の序がある。封面に「渓邑文林堂蔵版」とあり、また「興賢堂書舗唐少村」の記が刻されている。諸目は多くこれによって乾隆十七年文林堂刊とするが、直ちにそうと断定はできない。清代には思わぬ覆刻本が存在することが多い。唐少村は清の書肆と思われ、明の原刊本に捺してあった書肆の印記を清代そのままに覆刻したものであろう。博士は、『読易私記』（昭和十二年刊の『周易象義弁正』に附す）の中で、「（本書は）象について詳しく説明されていて、漢魏以来の古義もこれに及ぶものはない。」と評し、また、博士が戊辰戦争に従軍したときにも、本書を携えて片時も離さなかったという。

十七、易憲四巻図説一巻　明沈泓撰　清許王猷等校　清光緒十四年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。沈泓は華亭の人で明末崇禎十六年（一六四三）の進士。「四庫全書」では「総目」のみに挙げて写本は作製しなかった所謂「存目」に属する。「総目」によれば、本書は朱熹の本義を踏襲したものである、と。中国浙江図書館の古籍目録によれば、乾隆刊本と光緒刊本とがある。根本博士の朱書書き入れがある。

十八、周易禅解十巻　明釈智旭撰　正徳一年刊（和泉屋伊兵衛）

根本博士の目録外題あり。叡麓書房佐貞節蔵版。正徳一年叡山の宝積僧権の序。易の仏家による注解で中国でも珍しい遺品である。「四庫全書」には未収。

十九、易学義林十巻　明顔鯨撰　明末太倉王時敏刊

「根本／氏蔵」印記あり。巻一の三、四丁、巻九・十は補写。根本博士の朱点あり。「四庫全書」には未収。「中国古籍善本書目」未載。顔鯨（一五一四～一五九一）は滋渓（浙江省）の人。明嘉靖三十五年（一五五六）の進士。

二十、田間易学不分巻図象一巻　清銭澄之撰　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。銭澄之（一六一二～一六九三）は桐城（安徽省）の人。顧炎武・銭謙益・徐乾学等と交流があった。田間老人と号した。乾学の弟、秉義の康熙二十三年の序がある。『四庫全書総目』によれば、王弼・孔穎達の古註、程子・朱子の新註をいれ、持論平允　義尤明暢で図象も支離附会の弊が無い、という。『四庫全書』には『田間詩学』十二巻も収める。

二十一、喬氏易俟十八巻図一巻　清喬莱撰　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に「潜／庵」「樹嵐／山房」（ともに陰刻）の印がある。根本博士の朱による書き入れがある。喬莱（一六四二～一六九四）は宝応（江蘇省）の人。康熙十八年（一六七九）の博学鴻詞で翰林院侍読。『四庫全書総目』によれば、本書は宋・元の諸説を取り入れ、解説は人事や治乱の得失に及ぶことが多い。

二十二、御纂周易折中二十二巻　清李光地等奉勅撰　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。日本の表紙に改装。中本。根本博士の書き入れがある。清康熙五十四年（一七一五）康熙帝の御纂。宋以来の諸説を中心として、偏らない集説を編纂したのが本書で、明永楽帝の『易経大全』が雑多に諸説を取り入れている方法とは異なるものを示した。『四庫全書総目』は、本書が国朝の御纂であることにより、「数百年の学説の混乱がこ

こに至って融解し、数千年の画卦・繫辞の趣旨が大いに明らかになった。」と高く評する。本書は、清一代を通じて覆刻が繰り返され、版種も多い。幕末から明治にかけて日本の漢学者には歓迎された。因みに、斯道文庫の安井文庫中に、本書の渋江羽化過録海保漁村説書き入れ本ある。編者の李光地（一六四二～一七一八）は福建安溪の人。康熙九年の進士。後、文淵閣大学士となって、朱子学をもって康熙帝の信を得た。著に『榕村全集』がある。

二十三、同　江戸時代後期刊（加賀藩）覆清

右の書の覆刻本。末に「加賀／国学／蔵版」印がある。加賀藩は本書に『書経』『詩経』『春秋』を加え、『欽定四経』として出版した。十―七を参照。「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。根本博士の書き入れが少々ある。同版の薄葉刷りの一本（十―七）には博士の書き入れが非常に多い。

二十四、御纂周易述十巻　清汪由敦等奉勅撰　清刊

根本氏の印記はない。「伊澤／氏蔵」（陰刻）印記あり。博士の書き入れが少々ある。『四庫全書総目』は、『御纂周易述義』とする。前書『折中』を更に推し広めた乾隆帝の勅撰。博士は、『読易私記』（昭和十二年刊の『周易象義弁正』に附す）の中で、「易を読む者は先ず本書を読むべし。本書は古今の易の理を明らかにしていて、偏りがない。まさに入門書として適当である。」と評している。

二十五、周易述二十三巻　清恵棟撰　清乾隆二十五年雅雨堂刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。恵棟（一六九七～一七五八）は経書における漢代の注釈を研究した清朝考証学の大家。『四庫全書総目』によれば、本書は、漢の荀爽・虞翻の解を中心として鄭玄・宋咸・干宝諸家の説を採用して自らの説をも

加えたもので、定稿ではないが、その考証は拠るところがあり、空談の諸家とは一列でない、とする。根本博士は『読易私記』の中で、「漢代の散逸した説を幅広く集めているが、訓詁象数の末節に入り込んで、易象の本源に達していない。」と評する。そもそも博士の学問は漢魏以前の古聖人に帰ることを主張する。また、本書の博士の書き入れに次のようにある。「漢魏は易を以て革命の書と為す。恵棟之を用って周易述を作るは伏羲孔子の罪人なり。六十四卦は革命の説にあらざるはなし、と。其の害、引いて諸経に及ぶ。余、深く之を憂い、寐る能はざること数十年。余、『周易象義弁正』を著し、周易数千年の冤を洗はんと欲す。」もって、博士の学説を垣間見ることができよう。出版元である雅雨堂の号を持つ盧見曾（一六九〇～一七六八）は恵氏と同時代人。良書を刻した（十一、叢書類・五、六を参照）。本版は恵氏の没後まもなく開版したもので、恵氏の本意ではなかったとする説もある。「九葉／伝経」「元仲／珍蔵」などの印記が根本氏以前にある。

二十六、周易本義弁証三巻　清恵棟撰　蔣光弼等校　清刊

根本氏印記なし。封面・下象鼻に「省吾堂」「省吾堂蔵版」とある。省吾堂は蔣光弼の書斎号。蔣氏の伝は未詳であるが、恵棟の弟子に当たる学者であろう。南宋の朱熹・『周易本義』についての考証。『四庫全書』には収めない、所謂、四庫未収本。毎半葉十行二十一字（匡郭内縦十七・九横十二・四糎）。『続修四庫全書』（上海古籍出版社・一九九五）第二十一冊に六巻本を収載。

二十七、虞氏易礼二巻　清張恵言撰　清刊

二十八、虞氏易事二巻　清張恵言撰　清刊

三十、虞氏易変表二巻　清江承之撰　清刊

二十九、虞氏易候二巻　存巻一　清張恵言撰　清刊

以上四種は版式を同じくする叢刻。毎半葉十行二十四字左右双辺単黒魚尾。二十七と二十九本に「根本／氏蔵」「根本／子龍／

図書」印記あり。内側の表紙に根本氏の外題がある。著者の張氏は一七六一生一八〇二没。江蘇省武進の人。嘉慶四年（一七九九）の進士。古文に秀で、常州詞派・陽湖派等の流派を形成した。漢の虞翻の注釈を集め、専ら『易』についてはこの注釈の研究に終始した。『易礼・易事・易候』は四庫未収で、清朝の経解集『皇清経解』（清阮元編）には、張氏の虞氏易研究書として、『易礼』の他に『周易虞氏義』『周易虞氏消息』を収める。『皇清経解続編』（王先謙編）には『易事・易候』『易言』を収載。また、『続修四庫全書』第二十六冊には、これらの全てを収載する。江承之は一七八三生一八〇〇没で十八歳で夭折した人。『安甫遺学』三巻が『南菁書院叢書』に収められる。

三十一、周易虞氏消息二巻　清張惠言撰　清嘉慶八年序刊

三十二、周易虞氏義九巻　清張惠言撰　清嘉慶八年揚州阮元刊

両書は合刻されたもの。『義』の封面に「原附虞氏消息」「嘉慶八年揚州阮氏琅嬛𤣥館刊板」とある。版式は左右双辺有界毎半葉が十一行二十三字の単黒魚尾。『消息』は嘉慶八年の陳善の序、『義』は同年の阮元の序がある。「根本／氏蔵」の印記あり。四庫未収。

三十三、周易指三十八巻首一巻図五巻易断辞一巻　清端木国瑚撰　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。赤色封面あり。版式は左右双辺で毎半葉十二行二十七字（匡郭内縦十七・三横十三・六糎）。句点を刻す。端木国瑚は一七七三生一八三七没。浙江青田の人。道光十三年の進士。

三十四、周易廓二十四巻　清陳世鎔撰　清咸豊一年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。陳世鎔は安徽懐寧の人。道光十五年の進士。「井井／居士／珍蔵」「竹添／光鴻」

印記あり。竹添氏は天草の人。熊本藩文学木下犀潭の弟子で、東京帝国大学教授。根本博士は竹添氏の後任である。

三十五、周易旧注十二巻　清徐鼒撰　徐承祖等校　清光緒十二年東京使署刊　日本紙印

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」「通明／字／子龍」（白文）印記あり。絹表紙の特製本。根本博士の書き入れが周密。徐鼒は江蘇六合の人。一八一〇生一八六二没。道光二十五年（一八四五）の進士。封面に「光緒丙戌刊／于扶桑使廨」とあり、徐承祖が先祖の著書を日本で出版したもの。徐承祖は姚文棟（清末の政治家・蔵書家で東京使署に在住した）とともに大使の随行を務め、光緒十一年には日本の書誌学の善本目録である『経籍訪古志』を出版した。博士は明治十一年（一九七八）清国公使館に何如璋を訪問して以来公館との来往が多くなった。恐らく、徐氏は博士と交流深いものがあったのであろう。徐氏の寄贈本に係るものであろう。

三十六、易緯八種十二巻・易象意言一巻　漢鄭玄注（象）宋蔡淵撰　清刊　覆刻清武英殿聚珍版

「根本／氏蔵」印記あり。他に「宇都宮／学問所」等の印記がある。根本博士の朱筆による書き入れがある。清の内府・武英殿では、乾隆年間に木活字による出版（聚珍版）が行われ、本書はその覆刻である整版本。易緯八種類を合刻したもので、『四庫全書』には明の『永楽大典』から抜き出して収載した。『緯書』は、漢代に吉凶禍福を予言する書として『経書』にあやかって出現したもので、後漢に流行。『易』『尚書』等十種の『緯書』があるが、『易緯』のみが遺り、他は亡んだ。詳細は、『易緯の基礎的研究』（安居香山・中村璋八、昭和四十一年）を参照。

三十七、周易解十二巻　荻生徂徠撰　白井重行編　文化四年序刊（鶴岡致道館蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。茶色の元表紙に元題簽があり、封面に「致道館蔵版」と。文化四年の白井重行の

序がある。また、白井氏の『周易古筮略例』を付す。第一冊は他の五冊と伝来を異にし、第一冊のみに根本博士の朱筆による外題がある。本書は、徂徠の易説にして、宋学の朱熹の説に反駁を加えたものである。『庄内人名辞典』（昭和六十一年・同刊行会）によれば、白井重行は通称白井矢太夫、宝暦三（一七五三）～文化九（一八一二）。祖父の久兵衛が徂徠の門人であった。矢太夫も安永九年（一七八〇）に江戸に出、徂徠学派、太宰春台の門人に学び、文化二年（一八〇五）の藩校致道館開設に際し、祭酒（校長）となった人。以後、鶴岡藩は連綿と徂徠学を藩学とした。

三十八、又

根本氏印記なし。

三十九、周易会通纂要　大田錦城撰　江戸時代写

根本氏印記なし。表紙の目録外題は根本博士の手筆。刷り罫紙（十行）に書写する。版心には「愛閑堂蔵書」と印を捺すか書写する。大田錦城は加賀の儒者で明和二年（一七六五）～文政八年（一八二五）。考証学とも折中学とも言われる。皆川淇園・山本北山の学統である。本書は『近世漢学者伝記著作事典』（関義直・昭和五十六年）には著録するが、『国書総目録』には著録しない。

四十、　十三―四に移動

四十一、周易注　欠乾至否、益至萃　闕名者注　抄本（稿本か）

後補の茶表紙の内に本文共紙の表紙あり、本文は刷り罫紙（双辺有界十行＝縦二十・五横十三・五糎）に二十字詰めで書写する。訓点を施し、上欄には書き入れも多い。著者・筆者者ともに不明。根本博士の印記はない。

二、論語、四書類

一、論語十巻　魏何晏集解　室町時代写

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。縹色古表紙（縦二十四・二横十七・五糎）に「論語」と墨書。『序』が二丁あり、「論語学而第一　何晏集解　凡十／六章」と題して本文に入る。単辺有界八行十七字（匡郭内縦十七・七横十三糎）注小字双行。尾題は「論語巻第一終　経一千四百七十字／注一千五百一十字」と経注字数を備える。丁数は各巻それぞれ八、九、十二、十一、十一、十三、十五、十一、十一、七であり、五巻ごとに一冊となっている。全冊一筆で、書き入れも同時期の或いは本文と同筆の者かも知れない。墨の返り点・送りがな・縦点・附訓・朱点・朱引きを加える。室町時代に書写された、所謂古写本と呼ばれる『論語』は数十点の現存を確認する。それらは、寺院の学問を基盤にしたものや、博士家のテキストに基づいたもの、また、特定の学術集団によるものなど、いくつかの系統に分けられるが、本書は足利学校の系統に属する写本と思われる。書写年代は室町時代後期（十六世紀）であろう。根本博士は『論語講義』（明治三十九年・早稲田大学出版部）の中で、次のように述べて本書を紹介している。「論語には種々異なった本がありますが、此の論語は、応神天皇の時に日本に来たものであります。其の頃の本は、固より写本で、版本と云うものは、唐の末に始めて出来たもので、其の前は写本である。其の応神天皇の時に渡って来ました所の論語は、（中略）好むところの人が相互に之を借りて写したものである。其の頃に写した所の写本が、始終日本に伝わっていて、是れが真の正しき論語である。（中略）今日講ずる所は、我が日本に伝わって来た所の論語の中に於て、最も古く正しい写本に拠りて之を講じます。」即ち、朝鮮、百済の王仁が応神天皇の世に『千字文』『論語』を献じたのが、『論語』伝来の初めであると『古事記』に見えることから、まさにその王仁本がこの写本であるという前提で講義しているのである。これに対して、同じく漢学界の大家・朴堂安井小太郎は当時次のような意見を述べている。「根本氏の王仁伝来と称する古写本論語出版せられてより漢学界の好問題として研究せられたるが余は未だ其の原書を見ざるを以て可否の論を為す能はざりし。其の後諸氏の疑難に答へし関係

者の説を見るに普通に云ふ古本論語と大差なきに似たり。而して他本に絶えて見ざる異文は郷党篇・衛霊公篇・憲問篇の各一条なるに過ぎず。原来我邦に伝ふる古本論語は菅公親筆本と称する者を最古とす。菅公親筆なりとの証はなし。唯巻中に丞相の二字あるを以て菅公と推定したるなり。貞和二年に表装したる題字なれば貞和以前の物たるは明けし（南北朝時代）。其の他には嘉暦鈔本・大永鈔本・正平本・足利学校本等なり。是等の書は開成石経本・朱注本・十三経本とは異同甚多し。然れ共其の異なる所は経文に就いては殆ど一律に出で大なる相違あるを見ず。今その源流を詳知しがたきも恐らくは皇侃本より出でしならんと思はる。根本翁の古本が関係者の言の如き異同ありて其の紙質墨色字様等が数百年以前の物とすれば一種の古写本論語たるを失はざるべし。然れ共王仁伝来の本とするのは尚許多の徴証なかるべからず。普通本と異なるのみを以て王仁本とするは早計に失す。（以下略）」

この写本が本文上、他本と異なる特色を持つ点があることは確かであるが、古写本の本文異同は常見するところであって、本写本をもとに、根本博士が『易』や『詩経』等を引用して独特の考証をなして解釈しているその深い学問的姿勢に意義があるのであって、この写本の価値はまさにそこに求められるものである。

二、論語十巻附正平本論語札記　魏何晏集解　（附）市野迷庵撰　文化十三年序刊（市野氏青帰書屋）

「根本／子龍／図書」印記あり。日本の南朝正平十九年（一三六四）即ち中国、元の至正二十四年に泉州堺で出版された日本最古の『論語』のテキストを正平版『論語』と通称する。京都の清原博士家の鈔本に基づくもので、字体も奇古で字句の異同も他本に比して多いことから、貴重視されてきた。更にこれを写した室町時代抄本が中国に渡り、清初の蔵書家・銭曾がこれを珍重したが、正平の年号が解らず、これを朝鮮高麗のテキストとして紹介したことは有名である。この写本は後に清末の蔵書家・陸心源の有に帰し、今、静嘉堂文庫に所蔵される。実に、何百年の長旅を終え、帰国した写本で書物流伝の嘉話として、かつて徳富蘇峰が顛末を紹介して尚、有名となった。正平版『論語』以前にも『論語』が刊行されていた可能性はあるが、正平版が日本の刊本では最古の現存物である。「堺浦道祐居士重新命工鏤梓／正平甲辰五月吉日謹誌」「学古神徳揩法日下逸人貫書」という二つの跋文を備

えた双跋本と呼ばれる祖本（大阪府立図書館・宮内庁書陵部）を始めに、二種の跋文もそのまま覆刻した双跋本、前者の跋文のみを残して覆刻した単跋本、その単跋本の跋文だけを削り同じ版木で印刷した無跋本、更に、明応八年（一四九九）に覆刻した明応版と、要するに四版五種類の版本が現存している。詳しい研究は、今井貫一編の『正平版論語集解考』（昭和八年・大阪府立図書館）に尽きている。江戸時代後期、書誌学に基づいた考証学が盛んになると、勢い、正平版の研究が最も熱を帯びた。それは、四版の出版順序が明らかでなかったからである。そこで、第一人者・狩谷棭齋（安永三～天保六＝一七七四～一八三五）は寛政十二年に無跋本の版木を実見し、跋文を削った痕跡を版木に見出し、単跋本こそが最初の版刻に係ると考えた。当時、双跋の祖本は発見されていなかったので、双跋本の研究は充分に行えなかったこともあり、友人の書誌学者・市野迷庵（明和二～文政九＝一七六四～一八二六）は狩谷棭齋とともに単跋本を最善とし、文化年間これを覆刻したのが本書である。更に市野迷庵の校勘記を加え、江戸時代後期考証学を確たるものとした記念碑的出版となった。

三、又

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。根本博士朱書き入れ本。

四、論語十巻（集解単経本）　清原宣賢校　天文二年跋刊　後印

「根本／氏蔵」印記あり。他に「笠間文庫」印あり。常陸の笠間藩の旧蔵。所謂、本文だけで注の無い単経本。末尾に天文二年（一五三三）の清原宣賢（文明七～天文一九＝一四七五～一五五〇）のあとがきがあることから、天文版『論語』と通称する。清原博士家に代々伝わるテキストを、当時、『医書大全』や『三体詩』などを出版していた泉南の阿佐井野氏が翻刻したものである。その後、版木が堺の南宗寺に伝わり、明治時代ころまで断続的に印刷されていた。それ故に、南宗寺版という呼称も使われる。従って伝本は比較的多く、殆どが江戸時代に入ってから刷られた後印本である。文化八年（一八一一）には但馬出石藩主仙石正和が考

異を附して覆刻した。近代になって、大正五年には南宗寺で元の版本を使って再印、出版した。

五、論語集解十巻附攷異　魏何晏集解　吉田篁墩攷異　寛政三年刊（増田利房箕林山房）　木活字

「根本／氏蔵」印記あり。我が国の本格的な校勘学は、山井崑崙が享保年間に行った、足利学校における校書に始まり、『七経孟子考文』がその成果である。これを継承したのが、寛政年間の吉田篁墩（名、漢宦）で、慶長年間に木活字で刷られた古活字版を定本にして、他に七種のテキストを比べたものである。首に附す「聚珍版刷印旧本論語集解并攷異提要」は吉田氏の校勘学を端的に述べた論文である。聚珍版は活字版の雅称である。『論語』のテキスト問題は、以後、皆、本書に基づいて述べられた。根本博士の『論語講義』序文にも本書の引くテキスト八種類について言及されている。即ち、菅原道真親筆本・正平版・大永鈔本・永禄六年鈔本・天文版・国訓本・伊藤東涯刊本・慶長刊本である。博士所蔵の写本（一、に述べたもの）はこれらを凌ぐ古本（こほん）であるというわけである。尚、吉田氏の本書については、拙著「慶長刊論語集解の研究」（斯道文庫論集三十・平成八年）を参照。

六、論語集解十巻　伊藤東涯校　寛政二年刊（江戸、千鐘房須原屋茂兵衛）覆享保十七年刊本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。表紙に「旧本七種論語」と根本氏朱書。封面に「再版」とあり、奥付に「原版享保十七年壬子二月／再版寛政二年庚戌九月…須原屋茂兵衛寿梓」とある。伊藤東涯は伊藤仁齋の長男で古義堂二代。名は長胤、寛文十年（一六七〇）生、元文三年（一七三八）没。諡は紹述先生。『古義堂文庫目録』（天理図書館・昭和三十一年）によれば、明応八年（一四九九）に正平版を覆刻した、明応版『論語』に「享保十六年辛亥八月伊藤長胤蔵書」と識語あるもの（一一一―一二）が著録されている。こうした古本による東涯の校本を書肆が許可を得て出版したものが本書である。もとより古義堂の『論語』講述は仁齋の『論語古義』の校訂を中心とした精緻な学問であった。

七、論語十巻（縮臨古本論語集解）　魏何晏集解　石川之裘校　天保八年跋刊（津、有造館）

「根本／氏蔵」印記あり。根本博士朱墨書き入れ本。また、本書とは直接関係が無いが、書扉の遊紙に、博士の得意とする古刀剣に関するメモが記される。藤四郎吉光の刀についての箇条書き六則。（五）の項で述べた菅原道真親筆本というものを翻刻したテキストである。そもそもこの親筆本は津藩主藤堂家に伝わった。幕末に、藩の督学石川氏により翻刻が行われ、同じ頃、その写本の序文・巻一首・巻三の首末・奥書（順乗、深尊の二名によるもの、内、深尊の奥書は貞和二年＝南朝の正平一年＝一三四六の年号がある。）の部分を模刻し、ヲコト点を朱刷りにした套印本を出版した。嘉永一年（一八四八）には、北野宮寺学堂から、本文のみにヲコト点を読み下した訓を附したものが上梓された（『和刻本経書集成』昭和五十一年・汲古書院・所収）。勿論、この菅公親筆と言われる古写本は、今、伝わらない。

八、又　明治印

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。根本氏の書き入れは無い。

九、論語集解義疏十巻　魏何晏集解　梁皇侃義疏　根本武夷校　寛延三年刊（江戸、藤木久市等）

「根本／氏蔵」印あり。根本博士朱墨書き入れ周密。梁皇侃の注釈『義疏』は、宋時代の書目（例えば尤袤『遂初堂書目』、晁公武『郡斎読書志』等）に著録されるが、それ以降、伝わらなくなった。日本には室町時代に比較的よく読まれ、写本は二十種余り伝存している。これらの写本の出自は一系に帰するようであるが、室町時代の『論語』講読は学僧を中心とした様々な講説を背景にしているだけに、写本の成立はそう簡単では無い。山井崑崙が享保年間に足利学校において校書を行ない、『七経孟子考文』を完成した、その後に同じ徂徠門下の根本武夷（名は遜志、根本博士とは関係が無い）が足利学校の古写本『論語義疏』を校訂翻刻した。一躍、中国では足利の名が有名になった。太宰春台の校訂翻刻した、足利本『古文孝経』とともに、三書が、後の『四庫全

書』に収載され、日本漢学を代表する偉業を成し遂げた。大正十三年には、大阪の懐徳堂から武内義雄の校訂による翻刻が行われた。根本武夷校訂の本書は、一度再版したが、明治時代まで刷られ続けたベストセラーであった。もとより、根本通明博士は『論語』本文に力を用いる学者であった。義疏本を評しては、菅公親筆本の次に良いものであるとしている。

十、同　附皇侃論語義疏新刻序　同　同　清刊（長塘　鮑氏）　知不足斎叢書第七集　翻前記本

「根本／氏蔵」「通明／字／子龍」（陰刻）印記あり。他に「木氏／家蔵」印あり。根本博士朱墨書き入れ本。鮑廷博（一七二八～一八一四＝雍正六～嘉慶十九）は安徽省歙県の人。『四庫全書』編纂時、六百種余りの蔵書を皇帝に献じた清朝屈指の蔵書家。知不足斎叢書は、自蔵の稀覯書を三十集に亘って出版した大型の叢書。清朝の学者は『皇侃論語義疏』を専らこのテキストで読むこととなる。

十一、論語正義二十四巻　清劉宝楠撰　男恭冕編　清同治五年刊

「根本／氏蔵」印記あり。帙に清朝の学者・楊守敬の自筆の題簽を貼る。「論語正義　惺吾自贈／根本先生」と。即ち楊氏が根本博士に贈ったものである。楊守敬（一八三九～一九一五＝道光一九～民国四）は湖北宜都の人。光緒六年（一八八〇、明治十三）に清国駐日公使の随員として来日した。光緒十年帰国するまでに、大量の古典籍を買い集めた。『日本訪書志』『留真譜』（善本の書影）等はその成果である。その間、日本の蔵書家・書家・学者文人等と幅広い交流を持った。公使が何如璋から黎庶昌に替わると、その収集した古書のうち、既に中国では失われてしまった二十六種を『古逸叢書』として出版した。後、観海堂と名付けられたこの蔵書は、武昌、上海等を転々として、現在台北の故宮博物院に主として所蔵されている。楊氏は他にも金石学や地理学に多大な貢献をなし、近代史上、最も著名な学者の一人である。明治十一年（光緒四）、根本博士は前年に着任した公使何如璋を訪問し、以後、博士の学名は斯界に轟いた。博士は本書を楊氏に懇望して止まず、楊氏は帰国に際していったん梱包し終えた箱から再

び取り出して送呈した。その旨を記した跋文（楊氏自筆）が三条、ある。

「此《論語正義》為劉君恭俛所贈。其書超皇疏之上、無論邢氏也。攜之行篋未嘗漸離。根本先生見而羨之、介　巖谷一六求此書。會余歸期迫、已貯入行箱釘封、不易出。余語一六云、能以徐鼎《詩廣詁》相易者即為出之　旋一六答云、根本亦未忍棄《廣詁》。願手鈔以相贈。嘻、以三十卷書、不辭手鈔之勞而能易此則好之之蔦與吾同情。迺毀篋而出之以贈　守敬記　光緒甲申四月「楊印／守敬」

「根本先生閣下。承示那時《論語正義》弟近日正收拾入箱。然先生之需不敢辭勞。弟亦望先生之《詩廣詁》。未知可以相易否？如蒙之悅、弟預再開箱亦樂為此後。　弟守敬」

「一六先生閣下。《論語正義》毀篋出之。伏祈轉。根本先生更煩寄語徐氏、《詩廣詁》鈔本必當踐約幸勾食言以余好書之蔦與根本先生同情也。即請晩收不　弟守敬」

根本博士の書き入れが多数ある。即ち、菅本（有造館本による）、正平本、天文本を用いて校合している。劉宝楠（一七九一～一八五五）は江蘇宝応の人。道光二十年の進士。子の恭冕が完成させた『論語正義』は、清の焦循の『孟子正義』とともに、清朝の注釈書の名著とされる。後、王先謙の編纂に係る『皇清経解続編』（清光緒十四年刊本）に収載された。

十二、郷党正義十四巻　清王渭撰　清道光二十一年刊（藝海堂蔵版）　日新館旧蔵

根本博士書き入れ本。根本博士の蔵印は無い。「道光辛丑…呉県王亮生著…藝海堂蔵版」と封面にあり。双辺、十行二十字、黒口、双黒魚尾。句点を刻す。或いはやや降った覆刻本かも知れない。「日新館／蔵書記」印あり。

十三、四書白文　元録三年刊（京、松林軒栗山氏）

「根本／氏蔵」印記あり。原装縹色表紙、縦三十・七糎横二十・六糎の大本。封面に「元禄三庚午暦初冬吉旦／四書白文／洛陽

書肆松林軒栗山氏開版」とあり。四周双辺九行十六字白口双黒魚尾。内匡郭縦二十糎横十六・二糎。句点・声点を刻す。巻頭は「論語巻之」と題し、「一」が無い。根本博士の書き入れ少々あり。江戸時代の四書（大学・中庸・論語・孟子）出版は、夥しい量であるが、本文のみで朱子の注釈を付さないものを白文と称した。後世の漢文では、返り点がないことを白文と言うが、江戸時代は意味が違う。従って、白文本にも訓を付さないものと、付訓本とがある。これは、前者である。元禄時代は、将軍の嗜好とも相俟って、優雅で立派な四書が多く出版されている。寛文から元禄にかけての四書が江戸時代の全盛と言えるであろう。本版は稀覯に属する版種である。

十四、四書集注（大学中庸各一巻　論語十巻　孟子七巻　大学或問中庸或問各一巻）宋朱熹撰　明嘉靖三十年刊（逢原谿館石筍山人）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。根本博士の書き入れあり。版式は、左右双辺有界九行十七字、匡郭縦十八・二横十三・三糎、上層一・一糎内に音注を付す。版心は白口、魚尾あり。下部に「朱子高」等の刻工名がある。『孟子』末に双辺の木記があり、「嘉靖辛亥歳石筍山人／梓於逢原谿館」と刻す。白綿紙。明代の『四書集注』は十九巻本から四十一巻本まで幅広く出版された。何れも伝本は多くはない。私人による本版のような自家版は尚珍しい。根本博士はけして珍しい版本を収集していたわけではないが、古刀剣に関する鑑識眼は書物へのそれとけして無関係では無い。

十五、四書経注集證（大学一巻　論語十巻　孟子七巻）欠中庸一巻　宋朱熹集注　清呉昌宗集證　清嘉慶三年刊（江都、汪氏蔵版）

「根本／氏蔵」印記あり。根本博士の書き入れが頗る多い。博引傍証、自説をも加え、『四書』の所蔵本のなかでは、最も意を用いたテキストである。封面に「嘉慶三年鐫／江都汪氏蔵版」とあり。版式は単辺有界十一行二十五字、版心に単黒魚尾がある。呉昌宗については未考。

十六、較定四書句読正文六巻（大学中庸各一巻　論語孟子各二巻）　明何楷撰　清刊

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れ少々。版式は単辺有界九行十八字、匡郭縦十九・五横十二・七糎、上層三・三糎。句点を刻す。版心に単黒魚尾あり。首に天啓五年の何楷の序がある。何楷は福建漳州の人で、明末の経学者。『古周易訂詁』『詩経世本古義』がある。博士はこの何れをも愛読しており、何楷の学問を高く評価している。やはり、『易』に長じた学者は、博士の同好の士とされたのであろう。

十七、十―十二に移動。

十八、四書答問十二巻　清秦士顕撰　清蕭士然編　清嘉慶十八年刊（文盛堂蔵版）

根本氏印記なし。封面は「四書難題問答」とする。また、封面（黄色）に「嘉慶癸酉年新鐫」と。雍正十二年凌如煥、乾隆十九年蕭士然のそれぞれ序あり。大学二巻論語四巻孟子四巻中庸二巻。版式は単辺有界九行二十三字、匡郭縦十八横十一・六糎、句点・圏点を刻す。版心に単黒魚尾あり、版心下部に「寿昌講堂」とある。秦士顕は未考。本書も『販書隅記』続編（孫殿起編・一九八〇・上海古籍出版社）に見えるぐらいで、稀見のもの。

一九、古本大学　附明東皐心越序　明朱舜水写　（序・心越写）　特大

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。縦二十八・七横二十二糎の藍色絹表紙に「古本大学　全」と墨書する。末に「朱之瑜」と署名あり、「朱印／之瑜」（陰刻）「楚璵」印記あり。明の遺民・朱舜水（一六〇〇～一六八二）が草書で記した『大学』。朱氏は万治二年（一六五九）長崎に亡命の後、水戸藩の徳川光圀にもてなされ、水戸学に強い影響を与えた。心越興儔（一六三九～一六九五）は明の禅僧で、延宝五年（一六七七）杭州から長崎に至り、天和三年（一六八三）水戸に至った。心越の序文（自筆）

は以下の如し。

陽明先生撰（「和光／同塵」朱印）／大学之要／誠意而已／矣誠意之／□格物而／已矣誠意／之極止至／善而已矣／止善之則／致知而已／矣正止復／其体也修／身著其用／也以言乎／己謂之明／徳以言乎／人謂之親／民以言乎／天地之間／則備矣是／故至善也／者止之本／体也連而／後有不善／而本体之／知未嘗不／知也意者／其動也物／者其事也／致其本体／之知而動／無不善態／非即其事／而格之則／亦無以致／其知故致／知者誠意／之本也格／物者致知／之実也物／格則知致／意誠而有／以復其本／体是之謂／止至善聖／人耀人之／求之於外／也而反覆／其辞旧本／折而聖人／之意亡矣／是故不務／於誠意而／徒以格物／者謂之支／不事於格／物而徒以／誠意者謂／之虚不本／於致知而／徒以格物／誠意者謂／之妄支與／虚與妄其／於至善也／遠矣合之／以敬而益／□補之以／伝而益離／吾耀学之／曰遠於至／善也去分／章而復旧／本猶爲之／釈以引其／義庶幾復／見聖人之／止而求之／者有其要／噫□□致／知則□乎／止□致知／焉尽矣　東皐越　「樵雲」（陰刻）

以上の本件に由緒を記した紙片が数枚ある。明治三十三年前田香雪のメモによればこの時既に本書は秋田県立図書館に収蔵されていた。根本氏七十九才の時である。

二十、大学解　明郝敬撰　三浦邦彦校　文化四年刊　斉政館蔵版（京、芸香閣梶川七郎兵衛）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。書き入れ少々。封面に「文化丁卯朧月繡梓　芸香閣発兌」とあり。奥付に「斉政館蔵」と刻し印記もあり。書肆は、京の梶川、江戸の須原屋、大阪の河内屋の三肆。郝敬（一五五八～一六三九）は明の萬暦十七年の進士。経学に深く、十一九に『九部経解』が見えるが、根本博士が評価する学者の一人である。『四庫全書』には、『孟子説解』等多くが収載されるが、本書は未載。

二十一、中庸　漢鄭玄注　明和七年刊（京、尚書堂仁兵衛）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。所謂、『中庸古注』で『礼記』中の『中庸』篇に施された古注を出版したもの。刊記には他に山崎金兵衛、須原屋茂兵衛がある。尚書堂の販売目録六葉あり。

二十二、孟子正文七巻　附章指　片山兼山句読　安永九年跋刊文政一年印（江戸、西村宗七、松本兵助）

「根本／氏蔵」印記あり。奥付に「青蘿館蔵／文政九年戊寅仲秋／…」とあり。『孟子』の注釈書は、後漢の趙岐（?～建安六年＝二〇一）注の古注と宋の朱熹の新注があり、本書は古注本によったテキストで注釈を削去したものである。江戸時代は『四書』ともに宋朱熹の注釈が主流であったが、江戸後期に片山兼山らの古注派が一定の力を保った。その教科書が本書である。章指は各章のまとめで、趙注特有のもの。

二十三、孟子音義二巻　附孟子篇叙　宋孫奭撰　（附）漢趙岐撰　清黄丕烈校　文化十年跋刊覆清嘉慶十四年刊本

「根本／氏蔵」印記あり。宋孫奭は『孟子注疏』を撰したと言われる。その音注のみの単行本で、清朝まではその宋刊本が存し、蔵書家黄丕烈が嘉慶時代に複製を作り、流布させた。これも江戸時代の古注系の学者が注目し、跋にとると泉豊洲（江戸後期の儒者）の遺志により弟子が刻したという。孟子篇叙は趙岐の孟子全体のまとめで、宋蜀刻大字本と日本の一部の古写本のみに附されるめずらしい一文である。

二十四、大学解　荻生徂徠撰　江戸時代刊（群玉堂・玉海堂）

根本氏印記なし。『中庸解』とともに出版された。

二十五、正平本論語札記　市野迷庵撰　文化十年序刊

「根本／氏蔵」印記あり。他に「古河／文庫」印あり。この類の（二）に述べた附録の部分。単行か合印の離れかは明らかでない。

三、詩経類

一、毛詩故訓伝三十巻毛詩音義三巻鄭氏詩譜一巻　漢毛亨伝　漢鄭玄箋　唐陸徳明音　清嘉慶二十一年刊（木瀆周氏枕経楼）　松崎慊堂旧蔵

「根本／氏蔵」印記あり。根本博士書き入れあり。左右双辺有界九行二十二字匡郭縦十八・四横十二・六糎。扉に「枕経楼蔵版」また封面に「嘉慶丙子閏月／木瀆周氏刊行」とある。「益城松氏」印あり。根本博士の『詩経講義』に言う。「詩経に四種あり。今伝わるものは毛詩にして毛公の伝えし所なり。その他、韓詩・魯詩・斉詩あり。韓詩は韓英の伝えたるもの、三家の詩は漢の頃盛んに行われて、然るに毛伝のみ行われざりし。然るに三家の詩その実は正しくない。毛詩はにわかに周の頃より伝わりたるものなり。此の毛公の説かれたる者を毛詩と言う。その後、鄭玄（一二七～二〇〇）という後漢の大学者あり。この人は初め三家の詩を学びしが、晩年に至りて三家の不可なるを悟り、毛詩を助けて鄭箋を書きたり。」中国最古の目録『漢書藝文志』には『毛詩故訓伝三十巻』と著録される。顧実の『漢書藝文志講疏』には「毛公釈詩実兼詁・訓・伝三体、故名其書為詁訓伝。」と清馬瑞辰の『毛詩伝箋通釈』の説を引用する。現在、最も見やすいテキストは『毛詩正義（注疏）』四十巻（二十巻また三十巻また七十巻）である。『四庫全書』にも収載する。松崎慊堂は幕末の考証学者。明和七～天保十五（一七七〇～一八四四）。

二、李迂仲黄実夫毛詩集解四十二巻（欠巻十四～二十）　宋李樗・黄櫄撰　宋呂祖謙音　清刊　通志堂經解本

根本氏印記なし。本書は『四庫全書』収載。『四庫全書総目提要』によれば、著者の二氏はともに福建の人で、それぞれ『毛詩

詳解』三十六巻、『詩解』二十巻を著している。建陽の書肆が二書を合編したものであると言う。『四庫全書』は『毛詩李黄集解』と題している。『通志堂經解』には康熙の原刊と同治の覆刻がある。本版は原刊と目される。

三、詩序辯説　宋朱熹撰　江戸時代末刊（江戸、出雲寺万次郎）

「根本／氏蔵」印記あり。江戸昌平校で出版した「官版」。外題に「官版」と題する。しかし官版諸書目に著録せず。後考。根本博士の『詩経講義』によると「古序は序文の始めなり。朱子は一旦此の古序を削りたるも、晩年に至りて之を採れり。一体朱子は詩経に対して三度其説を変え、殆ど定見なし。」

四、毛詩古音攷五巻　明陳第撰　明焦竑訂　清徐時作校　清刊

「根本／氏蔵」印記あり。書き入れ無し。版式は双辺有界十行二十一字、匡郭縦十八横十二・二糎。封面に「武昌張／氏校刊」と。乾隆二十七年徐時作の序文あり。『四庫全書』小学類に収める。『四庫全書総目提要』によれば、顧炎武『詩本音』江永『古韻標准』と並び古音研究の名著。初め本書は焦竑以外の人には理解できず流布しなかった。徐時作が覆刊して今に伝わる。古韻の津梁を求めんとすれば、是をおいて由る無し、と言う。

五、詩経世本古義不分巻首一巻　明何楷撰　明末刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。首のみに博士の墨点がある。崇禎十四年の自序あり。部分的に補刻を加えているか。何楷については一―十六『古周易訂詁』にすでに述べた。博士はこの人の経学を大変評価する。『四庫全書総目提要』も本書への評価は高い。時代別に詩を配列し直したのは、経文に手を加える明人の悪い癖であるとも言われる。日本では寛政年間に会津藩がこの明版を覆刻している。

六、御纂詩義折衷二十巻　清傅恒等奉勅撰　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の自筆目録がある。首に汪由敦の乾隆二十年の序がある。字様は乾隆にあらず。覆刻であろう。乾隆帝の御纂。康熙帝の御纂に『欽定詩経伝説彙纂』がある。

七、三家詩拾遺十巻　清范家相撰　清刊覆清嘉慶十五年古趣亭蔵版本

「根本／氏蔵」印記あり。封面に「嘉慶庚午年鐫　古趣亭蔵版」とあるも字様は覆刻に似たり。『四庫全書』収載。『提要』によれば范氏は乾隆五十五年の進士。柳州の知府。三―一に述べた亡佚した三家詩を諸書から復元したもので、宋の王応麟『詩考』の試みた輯佚を受け継いだ。

八、詩瀋二十巻　清范家相撰　清刊覆清乾隆三十九年古趣亭蔵版本

「根本／氏蔵」印記あり。封面に「乾隆庚午年鐫　古趣亭蔵版」とあり、「范氏原板」「墨潤印行」と朱印を捺す。これも字様覆刻らしい。左右双辺有界十行二十二字黒口双黒魚尾匡郭縦十七・三横十一・八糎。これも『四庫全書』収載。『提要』によれば、范氏の学問は、毛奇齢に源があるという。毛氏は博引傍証で先儒を攻撃すること甚だしいものがあったが、范氏は敢えて放言を慎んだと言う。

九、毛詩故訓伝三十巻　清段玉裁訂　清嘉慶二十一年刊（段氏七葉衍羊堂）

「根本／氏蔵」印記あり。封面に「嘉慶丙子歳七葉／衍羊堂段氏校栞」とあり。博士の書き入れがある。段玉裁（一七三五～一八一五）は江蘇省金壇の人。乾隆二十五年の挙人。考証学の大宗。『皇清經解』所収。

十、毛詩後箋三十巻　清胡承珙撰　陳奐補　清道光十七年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れ少々。白紙印。首に道光十七年の陳奐序がある。胡承珙（一七七六～一八三二）は嘉慶十年の進士。安徽涇県の人。『皇清經解続編』所収。

十一、厳氏詩輯補義八巻　清劉燦編　清嘉慶十六年序刊（鎮海　劉氏墨荘蔵版）

根本氏印記なし。宋の厳粲撰の『詩輯』を補ったもの。『詩輯』は『四庫全書』収載。『提要』によれば、呂祖謙の『呂氏家塾読詩記』と並び称される名著である。

十二、詩毛詩伝疏三十巻毛詩説一巻　清陳奐撰　清道光二十七年刊（陳氏掃葉山荘）初印　竹添井井旧蔵

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」「通明／字／子龍」（陰刻）印記あり。また、「竹添／光鴻」「井井／居士／珍蔵」「竹添／光鴻／之章」（陰刻）印記あり。竹添井井は熊本出身の漢学者。一八四二～一九一七。外交官を勤め、帝国大学文科大学の教授となるも、明治二十八年辞職し、その後任として根本博士が就任したのである。島田重礼の薦めによる。博士は七十五才になっていた。以後、明治三十八年八十四才まで奉職した。竹添井井は『左氏会箋』（春秋左氏伝の注釈書）を著す。外題は竹添氏筆。目録は根本博士筆。封面に「呉門南園掃葉／山荘陳氏蔵版」とあり。左右双辺十行二十一字有界匡郭縦十七・二横十二・四糎の原刻初印。粗黒口双黒魚尾。博士の朱墨書き入れ多し。『皇清經解続編』所収。著者陳奐（一七八五～一八六三）は蘇州の人。本書は清代詩経学の最も優れた成果と目されている。

十三、詩序広義二十四巻（読詩補義）　清姜炳璋撰　清刊　村岡藩明倫館旧蔵

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に「明倫／館図／書記」「村岡／藩蔵」印記。封面に「進呈御覧採入四庫全書」

「尊行堂蔵版」とあり。乾隆癸未銭維城の序、乾隆二十七年自序。また嘉慶二十年孫人寛の序。総論・四庫提要を付す。左右双辺十一行二十二字有界単魚尾匡郭内縦十八・四横十二・五糎。『四庫全書』収載で後に原刊本を覆刻したもの。著者は浙江象山の人。乾隆十九年の進士。『詩序』についての解説論文。

十四、詩経揭要四巻　清許宝善編　清刊　標注本　明徳館旧蔵

「根本／氏蔵」印記あり。栗皮色の後補表紙、金色の題箋。九行二十一字左右双辺匡郭縦十三・四横十一・五糎。上欄五・五糎。単黒魚尾。句点を刻す。「明道／館図／書章」（陰刻）「明徳／館図／書章」は巻一、二、三の首にありもと分冊していたものを一冊に合冊したもの。著者は江蘇青浦の人。乾隆二十五年の進士。『五経揭要』を著す。朱子の集伝本に毛鄭注等を『詩経伝説彙纂』に照らして編纂したもの。

十五、詩経正解三十三巻　清姜文灿撰　菅野侗校　安政五年刊（志賀氏蔵版）木活字印

「根本／氏蔵」印記あり。根本博士書き入れあり。封面に「安政戊午仲夏」「志賀氏蔵」、奥付に「安政戊午孟春」とあり。また、製本、長谷川和三郎・奎暉閣秀次郎等三名。「奎暉閣植字」とある。句点も印刷。原書は『四庫全書存目』に著録。

十六、毛詩正文三巻　片山兼山句読　久保謙訂　文政四年刊（京、勝村治右衛門等）覆刻天明四年刊本

「根本／氏蔵」印記あり。片山兼山については、二一―二十二で述べた。片山学派は『五経』という纏まった叢書は出していないが、『周易正文』『古文尚書正文』本書『禮記正文』の四経正文を刊行している。この学派の系統は幕末の考証学、校勘学の源流をなすもので、目立たないが重要な出版物である。博士の書き入れも無いが、およそ明治までの漢学者の書架には備えられていることが多い。

十七、又　存巻上

四、経書類

一　九経古義十六巻（周易古義、尚書古義、毛詩古義、周礼古義、儀礼古義、礼記古義、公羊古義各二巻、穀梁古義、論語古義各一巻）　清惠棟撰　清刊　覆刻省吾堂蔵版本

根本氏印記無し。惠棟については、一―二十五を参照。『皇清経解』にも所収。これは単行で蔣氏省吾堂の刊刻にかかる。十行二十一字単黒魚尾、黒口左右双辺。

二　書経正文二巻　伊藤東涯校　寛政五年刊（京、文林堂）古義堂蔵版

「根本／氏蔵」印記あり。虞書・夏書・尚書・周書からなる古代の帝王に関する記録、『尚書』の本文で、伊藤仁斎の子東涯（寛文十～元文一）の校訂による『五経』正文のうちの一。江戸時代、『五経』を校訂出版した儒者は十家を降らないが、伊藤家古義堂の点本は比較的伝本が少ない。もともと寛保年間頃、初版が出され、これは寛政の覆刻である。奥付に京都書肆文林堂中川藤四郎の名がある。

三　書経二巻（官板五経）　慶応三年刊（江戸、出雲寺万次郎）

根本氏印無し。外題に官版と題し、奥付に「御書物師、出雲寺万次郎」とあり。句点、返り点を刻す。

四　尚書大伝四巻附考異、補遺、続補遺　漢伏生撰　漢鄭玄注　清盧文弨校　清嘉慶十七年刊（山淵堂蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に「内藤／耻叟」の印あり。内藤耻叟は文政十～明治三十六、水戸藩出身の歴

史学者、後、帝国大学教授。『古事類苑』の編集。乾隆二十一年（一七五六）の盧見曽の序があれば、雅雨堂叢書本を覆刻したものであろう。十一―五を参照。伏生は伏勝ともいう。『四庫全書総目』は純粋な訓詁解釈書と区別して、「附録」に著録する。宋代には完本が失われ、清の孔広林・盧見曽・陳寿祺等が佚文を輯めた。陳本が完備していると言われる。

五　尚書正義二十巻附三山黄唐礼記正義跋　漢孔安国撰　唐孔穎達奉敕撰　細川利和校　嘉永一年刊（熊本、時習館蔵版）［江戸、山城屋佐兵衛、大坂、河内屋喜兵衛］覆刻松崎慊堂影鈔足利学校蔵南宋刻本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。『尚書』本文に漢の孔安国の注釈、唐の孔穎達の正義を加え一書にまとめた注疏本。これら本文・注釈・正義はもともと単行本で行われ、南宋の初に初めて合刻本が出現した。日本の足利学校には、その最も古い合刻の注疏本『五経』が室町時代の武将上杉憲実（一四一〇～六六）によって寄進されていた。上杉氏は関東管領で晩年山口の大内氏のもとにあった。大内氏は文化政策に力あり、当時古典籍の輸入、読書人の庇護に名声があった。足利の宋版もこうした背景によるものと想像される。足利の『五経』のうち、『詩経』『春秋』は劉氏一経堂刊本で『易経』『書経』『礼記』は同じ浙江刊本で、この『五経』の精美によって足利学校は海内に名を馳せることとなった。『礼記』の末に黄唐の跋があり、注疏合刻の経緯を述べている。幕末の校勘学の大家松崎慊堂（明和八～弘化一）は、夙に足利の宋版に注目し、『書経』の影写本を作成していた。松崎慊堂の出身である熊本の細川氏が慊堂の没後、嘉永一年（弘化四年）、慊堂の弟子で第十一代大学の頭林復斎の序文を加えて、その影写本を版におこし影刻したのが本書である。『礼記』の黄唐の跋も附されている。宋版の美しさもさることながら、この覆刻本の精美も目をみはるものがある。奥付に「熊本時習館蔵版／嘉永戊申晩秋／発行書林　河内屋、山城屋」とあり。博士購入時の領収書あり、東京琳琅閣の明治三十七年、七円五十銭であった。

六　尚書精義五十巻　宋黄倫撰　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。『四庫全書総目』巻十一に著録。本書は早く亡び、著者も詳細は不明である。『四庫全書』は『永楽大典』から集めたもの。清銭儀吉の『経苑』に新たに収められた。本書は双辺有界十行二十字、匡郭内縦十八・四横十二・八糎。毎巻末に「後学劉定裕校訂」とある。

七　古文尚書表注　宋金履祥撰　清納蘭成徳校　清光緒十年刊（埽葉山房）覆刻清同治間鍾謙鈞重刊通志堂経解本

「根本／氏蔵」印記あり。通志堂経解の覆刻本。一―十一、四―四十四等を参照。金履祥は宋の紹定五年～元大徳七年（一二三二～一三〇三）、浙江蘭溪の人。『四庫全書総目』巻十一に著録。

八　書纂言四巻　元吳澄撰　清納蘭成徳校　清刊

一―十三、三―二、等と所持者同一。根本氏印無し。吳澄についても一―十三を参照。『四庫全書総目』巻十二に著録。今文尚書を考究したもの。序題は「今文尚書纂言」。通志堂経解本。

九　尚書古文疏證八巻附朱子古文書疑　清閻若璩撰（附）閻詠撰　清刊　覆刻清乾隆眷西堂刊本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。閻若璩は明崇禎九年～清康熙四十三年（一六三六～一七〇四）、山西太原の人。尚書は、伏生の二十九篇が今文として伝わっていたが、漢の景定の時、孔子の旧宅の壁から十六篇多い古文尚書が現れ、西晋の永嘉の乱で亡び、東晋の元帝の時、梅賾が孔安国注『古文尚書』を献じ、以後唐代もこれを用い、今日に至っている。この梅賾本は偽書であるとする疑いは宋の吳棫・朱熹、元の吳澄・明の梅鷟等が論じたが、閻若璩はこれらの説を広め、『古文尚書』偽書説を明かにした。眷西堂は閻氏の号。

一〇　古文尚書攷二巻　清惠棟撰　清刊　覆刻乾隆五十七年読経楼刊本

根本氏印無し。惠棟については一―二十五等を参照。『皇清経解』にも所収。これは単行本。十行二十一字匡郭縦十七・四横十二・四糎。封面に乾隆の刊記があるが、覆刻であろう。

一一　尚書集注音疏十二巻　清江声撰　清乾隆五十八年序刊　批入本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。江声は一七二〇～一七九九、江蘇元和の人。前記惠棟の弟子。文字学に造詣深く、篆書を好んだ。前二書を基礎に漢儒の古訓を深く研究したもの。根本博士の書き入れあり。『皇清経解』にも所収。

一二　尚書後案三十巻　清王鳴盛撰　清乾隆四十五年刊（礼堂蔵版）　福知山藩惇明館旧蔵　批入本

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れあり。王鳴盛は一七二二～一七九七、江蘇嘉定の人。『十七史商榷』が有名。『皇清経解』にも所収。

一三　古文尚書撰異三十二巻　清段玉裁撰　清刊（七葉衍祥堂蔵版）　批入多

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れが頗る多い。段玉裁は一七三五～一八一五、江蘇金壇の人。戴震を師と仰ぎ、所謂皖派の樸学大師。『皇清経解』にも所収。

一四　周礼十二巻（周礼註疏詳解）（周礼輯義）　清姜兆錫輯義　清道光九年刊（聯墨堂）

本書は根本氏の印なく、明治四十一年大久保鉄作の寄付によるもの。ただし、第一冊目の外題は根本氏の筆に似ている。封面に道光九年の刊記がある。姜兆錫は一六六六～一七四五、江蘇丹陽の人。乾隆間、三礼館の編集。巻十一・十二は「周礼補」と題す。

一五　周礼漢読考六巻儀礼漢読考一巻　清段玉裁撰　清刊　覆刻経韻楼蔵版本

根本氏印無し。外題は根本氏の筆。扉に経韻楼蔵版とあるが、原刻ではなさそうである。『皇清経解』にも所収。

一六　儀礼十七巻（仿宋本厳州本儀礼）　漢鄭玄注　清黄丕烈校　清同治九年刊（楚北、崇文書局）覆刻清嘉慶二十年黄氏覆宋厳州刊本　杉原心斎旧蔵　批入本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。古代の法制儀式についての経書である『儀礼』は漢鄭玄の注本の宋版が伝存せず、この厳州（浙江省）本を最善とする。厳州で出版された宋版が黄丕烈の時代に存在し、嘉慶二十年黄氏はこれを覆刻した。以来、この覆刻本は厳州本と称されて尊ばれる。本書はその同治の更なる覆刻本である。杉原氏は幕末、幕府の儒官。根本博士の書き入れがある。

一七　儀礼析疑十七巻　清方苞撰　程崟等校　清刊

「根本／氏蔵」印記あり。左右双辺九行十九字単黒魚尾。句点を刻す。方苞は一六六八～一七四九、安徽桐城の人。古文を尊ぶ桐城派の祖。『望渓文集』がある。

一八　儀礼図六巻　清張惠言撰　同治九年刊（楚北、崇文書局）

「根本／氏蔵」印記あり。張惠言は一七六一～一八〇二、江蘇武進の人。嘉慶四年の進士。一―二十九等を参照。経学は『易』『礼』、文学では古文を修めた。崇文書局は清末に良書を集めて覆刻事業を行い、特に、乾隆嘉慶時代の覆宋本や定評ある論文を選んでいるのは注目に値する。特大。

一九　儀礼古今疏義十七巻　清胡承珙撰　清光緒三年刊（湖北、崇文書局）　竹添井井旧蔵

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。「竹添／光鴻」（陰刻）「井井／居士／珍蔵」印記もあり。特大。外題は竹添氏の筆。竹添氏は一―三十四等を参照。胡承珙は一七七六～一八三二、安徽涇県の人。嘉慶十年の進士。

二〇　礼記二十巻　漢鄭玄注　賀島矩直点　寛延二年刊　宝暦九年印（京、風月荘左衛門等）

「根本／氏蔵」印記あり。『五経』の古注本を京都の丸屋市兵衛等がシリーズとして出版した。『春秋』には及ばなかったようである。寛延二～四年頃に開板され、宝暦に奥付を変えて同じ版木で刷っている。補刻（修）を行っているかどうかは明確ではない。読むに便あり、非常に伝本の多い、売れた本である。

二一　新定三礼図二十巻　存巻五至十　宋攝崇義集注　江戸時代刊　覆刻清通志堂経解本

根本氏印無し。礼に関する図説の書で、古く漢代から編纂されてきたが、皆亡んで伝わらず、宋の攝崇義による本書と明の劉績によるものが現存する。『四庫全書総目』に著録。本書は通志堂経解本が流布し、日本では菊池南陽が通志堂経解本に点を施し、宝暦・寛政年間に出版されている。宋版は近代まで存在したようであるが、現存はしない。『四部叢刊』三編に収める蒙古定宗二年（一二四七）刊本が中国国家図書館の所蔵（涵芬楼旧蔵）で最善本となっている。

二二　礼記析疑四十八巻　清方苞撰　劉月三等校　六冊

前記十七と一連のもの。「根本／氏蔵」印記あり。外題は根本氏の筆。

二三　喪礼或問　清方苞撰　顧琮訂　清雍正四年序刊　一冊

前記十七、二十二と一連で、旧蔵者も同じ。根本氏印無し。外題に根本氏筆あり。

二四　夏小正輯註四巻　清范家相編　清嘉慶十五年刊（古趣亭蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。九行二十二字。范家相については三―七等を参照。夏小正はもと漢の戴徳撰の『大戴礼記』の一篇で四時の行事を記し、宋代以来、注釈書は多い。根本博士の外題がある。

二五　礼記揭要　存巻四至六　清許宝善撰　清刊

「根本／氏蔵」印記あり。三―十四と一連のもの。後補の茶表紙に金の題箋。上下二段、九行二十一字匡郭縦十三・三横十一・三糎。上段五・五糎。「明道／館図／書章」（陰刻）「明徳／館図／書章」（陰刻）印記あり、秋田藩校旧蔵。

二六　重訂斉家宝要二巻　清張文嘉編　張廷瑞校　元録十五年刊（京、吉村吉左衛門）

「根本／氏蔵」印記あり。張文嘉は一六一一～一六七八。浙江銭塘の人。『四庫全書総目』礼類存目三に著録。古今の様々な礼について述べたもの。こうした礼書は江戸時代、朱熹の『家礼』が最も流布、読まれ、本書は普及しなかった。

二七　春秋左氏経伝集解三十巻附春秋名号帰一図二巻、諸侯興廃、春秋提要、春秋列国東坡図説各一巻　晋杜預撰　唐陸徳明音義（名号）後蜀馮継先撰　明張一鯤、李時成閲　周光鎬、郭子章校　明萬暦八年刊（金陵、親仁堂）　批入本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。巻十四・二十六に博士の書き入れがある。刊記（木記）があり、「萬暦庚辰歳仲夏吉旦刻于金陵親仁堂」と。左右双辺九行二十字、匡郭縦二十・二横十三・七糎、単黒魚尾、版心下象鼻に刻工名を刻す。「李宗

文・張文・正文・付汝光・蔣寅」等多数。字数も刻す。紙質やや黄色を帯びる。『中国古籍善本書目』に著録し、中国に比較的多く伝本を存す。古代、山東魯の国の歴史を記した経書である『春秋』には『左氏伝』『公羊伝』『穀梁伝』の三種の解釈書があり、春秋末、魯の太史左丘明が記したと言われる『左伝』は西晋の杜預が『集解』をつくり、本文・伝・解を合編し、今日流布している姿となった。根本博士には『左伝』の講義録が無いが、『論語』や『周易』の解釈に『左伝』を用いることが多い。春秋名号帰一図は列国君臣の異名索引。

二八　春秋非左二巻　明郝敬撰　皆川淇園校　明和三年刊（京、河南四郎右衛門等）覆刻明刻本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。郝敬については十一九を参照。『春秋直解』の巻十四・十五に収めるもので、皆川淇園の校刻に係る。博士が最も愛読した学者である。皆川淇園については十二を参照。

二九　御纂春秋直解十二巻　清于敏中等奉勅撰　清乾隆二十三年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れはない。『四庫全書総目』は十五巻に作る。康熙間奉勅撰の『春秋伝説彙纂』に次ぐ乾隆時の奉勅撰。

三〇　春秋直解十二巻　清方苞撰　程崟等校　方道興編　清刊（抗希堂蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。方苞については四一十七等を参照。方氏著作の一連のものであろう。序の版心に墨訂が見える。博士の書き入れが少々。

三一　春秋繁露十七巻　漢董仲舒撰　明孫鑛評　明沈鼎新、朱養純参評、朱養和訂　清初刊（敦古斎蔵版）覆刻本

根本氏印無し。封面に「敦古斎重梓」と。天啓五年王明際、同年沈鼎新（花斎）の序あり。下象鼻に「花斎蔵版」とある。明末の沈氏刊本を敦古斎が覆刻したものであろう。前漢の董仲舒（前一七九～前一〇四）は『春秋公羊伝』を修め、儒家の思想と陰陽五行説を併せ、独特の世界観を表した哲学書で、『四庫全書総目』は、『春秋』の経義と関係が密接でないので、「春秋類」の附録に著録している。孫鑛は明浙江余姚の人。一五四二～一六一三。『孫月峰全集』がある。

三二　春秋繁露十七巻　漢董仲舒撰　清淩曙注　清嘉慶二十年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。書き入れは無い。

三四　孝経（古文孝経）単経本　江戸時代刊

「根本／氏蔵」印記あり。封面は赤色で「古文孝経」。単辺有界六行十二字、句点・返り点を刻す。博士の手で訓点を正す所あり。『孝経』は古くから儒教の経典として尊ばれ、漢の文帝（前二世紀）の時、国家の保護を受けるまでになった。同じ武帝（前一～二世紀）の時、孔子の旧宅の壁から古い文字で書かれた『孝経』が発見され、通行していたものを『今文孝経』、壁中のものを『古文孝経』と呼んで区別する。両者には文字章句の異同があり、一見して見分けがつく。『古文孝経』は漢の孔安国が注をつくり、これは早くから中国で滅び、日本にのみ遺っていた（逸存書）。『今文孝経』は、漢の鄭玄が注を作ったが、これも亡逸、唐の玄宗皇帝が注した所謂御注孝経が読まれた。むしろこうした注の無い単経本が読習の中心であったと言えよう。

三五　孝経（古文孝経）単経本　明朱舜水写（楷書）大本　一帖

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。二―十九の『大学』と同じ装丁で併せて一帙とする。朱舜水についても前記参照。

末に「朱印／之瑜」印記あり。

三六　孝経　単経古文　寛政九年序刊　批入多　大本

「根本／子龍／図書」印記あり。表紙の大きさは縦三十二・五横二十一・五糎。原義和の陰刻の序あり。双辺無界九行十八字、内匡郭縦十九・八横十三・六糎、版心単黒魚尾、句点を刻す。根本博士の書き入れが周密である。

三七　又　批入本

「根本／氏蔵」印記あり。前書と表紙も同じ。博士の書き入れがある。

三八　孝経（古文孝経孔氏伝）　漢孔安国伝　文政六年跋刊（福山藩蔵版）　二色套印　影摸弘安二年写元亨一年清原良枝奥書本　大本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に、「読杜／草堂」（寺田望南）印記あり。黄色空押し出つなぎ原装、縦三十一・五横二十一糎。ヲコト点を茶色で刷り、二色刷りとする。福山藩主阿部正精の跋がある。阿部家は書物を重んじた大名で、福山藩には考証学の風が栄えた。博士家清原氏の家に伝わる弘安二年（一二七九）の古写本に元亨一年（一三二一）清原良枝が奥書を加えたテキストを模写して版に起こしたのである。清原良枝は建長五～元弘一（一二五三～一三三一）、鎌倉時代後期の博士。

三九　孝経（古文孝経標註）　漢孔安国伝　太宰春台音　片山兼山標註　安政七年刊（江戸、崇山房小林新兵衛）　覆刻享保十七年刊本

「根本／氏蔵」印記あり。『古文孝経』は太宰春台の音注本が最も流行した。これはまた中国の『四庫全書』にも収められた。春

台は延宝八～延享四（一六八〇～一七四七）で、荻生徂徠の門下。日本儒学史のなかでは江戸時代後期を代表する経学家。片山兼山は、江戸後期の考証学派、享保十五～天明二（一七三〇～一七八二）、二―二十二、三―十六を参照。

四〇　孝経鄭注附孝経鄭氏解、孝経鄭注補證　漢鄭玄注　岡田新川校　（解）清臧鏞編　（補）清洪頤煊撰　文化十二年刊（官板）

覆清嘉慶刊鮑氏知不足斎叢書本　田安家旧蔵

「根本／氏蔵」印記あり。前述の通り、鄭玄注は今文で早く亡びたが、諸書に遺されたものから復元した所謂輯佚の学の成果である。鮑廷博の叢書を、名古屋藩儒の岡田新川が校訂したもの。「田安／府芸／堂印」等田安家の印あり。

四一　孝経　単経今文本　晋王羲之筆　貞享二年跋刊　陰刻

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。王羲之は四世紀東晋の書聖。根本博士は唐の顔眞卿の書法を学んだが、顔体はそれ以前の書風とは全く異なるものであった。

四二　孝経（較定孝経）　山本北山校　寛政九年序刊（明道館蔵版）　批入本

「根本／氏蔵」「根本／通明」（陰刻）「子／龍」印記あり。山本北山は宝暦二～文化九（一七五二～一八一二）、江戸後期の考証学家。北宋版の『孝経』（現宮内庁書陵部蔵）を蔵し、孝経楼主人と称した。この孝経は今文を定本とし、陰刻で古文を校している。また上欄に注を施す。源義和の序あり。版心下に「明道館蔵」と。根本氏書き入れに「秋田明徳館蔵版」とあり。山本北山は秋田藩校の創設に力があった。明道館は後に明徳館と称した。

四三　孝経（指解校本古文孝経）　宋司馬光指解　神野世猷校　文化十三年序刊明治印　批入本

根本氏印無し。宋の司馬光（一〇一九～一〇八六）は、独自に校訂した古文本を編し指解と称した。神野世猷は不詳であるが、松公軒が別号か。文化年間頃、『五経』の訓点本等の校訂をしている考証学者。名古屋藩の人か。

四四　経典釈文三十巻　唐陸徳明撰　清納蘭成徳校　清同治間刊

根本氏印無し。隋末唐初の陸徳明が『易・書・詩・三礼・三伝・孝経・論語・爾雅』の音注を作成し経学の源流を明かにした本で、宋以来必修の課本となっている。宋版が現存するが、清代は通志堂本が学者の拠り所であった。清の大学者徐乾学（一六三一～一六八四）が唐から明に至る経学の解釈書を網羅した叢書『通志堂経解』の内に収められているテキスト。この叢書は康熙間に初刻本が出、同治十二年に広東で覆刻された。初刻本は稀見。一―十一等を参照。納蘭成徳は徐氏の弟子。後に性徳と改名する。満州族で康熙の進士。詞に才を顕した。『通志堂集』がある。一六八五年三十一才で卒した。「日新館／蔵書印」あり。

四五　十三経集字摹本　清彭玉雯編　萬青銓校　清刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。道光己酉（二十九）の序がある。封面に「張小浦先生鑑定」と。

四六　新刻釈名八巻　漢劉熙撰　明畢效欽校　明暦二年刊（大阪、山崎仁右衛門）覆刻明刻本

「根本／氏蔵」印記あり。古字書『爾雅』の体例に倣った訓詁字書。明畢效欽の五雅本を覆刻したもの。刷り外題「劉熙逸雅」、単辺有界九行十七字、白口単黒魚尾。匡郭内縦十五・一横十一・四糎。明暦二年の刊記がある。但し書肆名は入れ木である。訓点を附刻する。やや白色の用紙で、唐本（中国刊本）を模倣している。

四七　経伝釈詞十巻　清王引之撰　東條方庵点　天保十二年序刊（森川氏雙柳舎蔵版）

「根本／氏蔵」印記あり。王引之（一七六六～一八三四）は高郵の人、王念孫の子。清朝考証学を代表する校勘学文字学の大家。本書は古代の経典に見える虚字（助字）一六〇字について例証の解説を行う訓詁学の名著で、嘉慶二十四年（一八一九）の単行本がある。後、『皇清経解』にも収められた。天保十二年は一八四一年で、幕末頃、清朝新刊の考証学著作の輸入が速やかであったことが分かる。東條方庵は幕末明治の儒者で東條一堂の子。信濃竜岡藩の修業館の藩儒であった。『五経』の校点も行っている。森川政名は不詳。封面に「合五巻　天保辛丑翻刻雙柳舎蔵」とあり。

四八　急就篇四巻　漢史游撰　唐顔師古注　宋王応麟音釈　明毛晋校　明末刊（毛氏汲古閣）　津逮秘書之一

「根本／氏蔵」印記あり。前漢の史游の編になる字書。もと子供の教科書的なものであるが、江戸後期の儒者はよく好んだようである。毛晋の叢書『津逮秘書』に所収。八行十九字。「文淵閣校／理翰林／院編集呉／省蘭印」の印記あり。

四九　大広益会玉篇三十巻　宋陳彭年等奉敕重修　慶長間刊　覆刻元至正二十六年南山書院刊本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。梁の顧野王の字書『玉篇』をもとに増修した字書で、『説文解字』『広韻』とともに重要な文字学の資料であり、日本でも中世以来よく使われた。日本の出版では『玉篇』が圧倒的に多い。本版は末に慶長九年の鉄山叟宗純の跋があるが、慶長時代（十六世紀末）の覆元本に二版あり、そのいずれであるかは再考を要する。匡郭内縦二十・九横十二・六糎。

五〇　増訂金壺字考十九巻二集二十一巻並補録補註　清田朝恒撰　清乾隆二十四年序刊（二集）同二十七年序刊（貽安堂蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。朱点は根本氏か。

五一　千字文註汪嘯尹先生纂輯　梁周興嗣次韻　清孫呂吉三参註　袁士宗考訂　蔡汪琮較正　清刊

「根本／氏蔵」印記あり。書き入れは無い。絹表紙。首に「清書千字文・大禹碑銘並釈文・五岳真形図」がある。『千字文』は四言字句が二百五十句あり、暗唱して様々な知識を身につけることができる教科書である。三世紀に我が国に最初にもたらされた漢籍が『論語』『千字文』であった。

五二　歴朝聖賢篆書百体千文附名公先生贈言　梁周興嗣次韻　清尤侗鑑定　孫枝秀集篆　周霖参訂　清康熙二十四年序刊（棣鄂堂蔵版）

「根本／氏蔵」印記あり。絹表紙。『千字文』をもとにした篆書の手本集。この類の書はかなり多く編纂されていたと思われるが、却って流伝は少ない。

五三　康熙字典十二集附検字、辨似、補遺、備考、等韻　清淩紹雯等奉敕撰　清刊　批入本

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れがある。四周双辺無界八行本、匡郭内縦十二・九横八・九糎。本書の清版は覆刻本が極めて多い。

五四　字貫六十巻　存検字、辯似、巻一天文、巻二時令・數目、巻三地理上、巻四地理中　清王錫侯編　清抄本　禁書

根本氏印無し。四周双辺の刷り罫紙（斐紙系）、版心単黒魚尾、上象鼻に「字貫」と刻す。八行で匡郭内縦十七・九横十二・五糎。版本の敷き写しであるが、本書は禁書となって板を焼かれたもので、伝本は稀である。

五五　尚書提綱二巻附附録　金岳陽撰　安政三年写（大野光明）　假名交

根本氏印無し。十五行、毎行約三十三字。『国書総目録』に著録が無い。金岳陽は宝暦八～文化十。秋田の人。秋田藩儒。

五六　読礼肆考（深衣考、凶服考、寢廟堂室考、周量考）　猪飼敬所撰　弘化二年序刊（津藩有造館）木活　久居藩下山蔵印記

根本氏印無し。猪飼敬所は宝暦十一～弘化二。折衷学派の儒学者。津藩に迎えられ、津で没した。序は津藩督学、斉藤正謙。

五七　春秋内外伝之八考　朝川善庵撰　江戸時代写

「根本／氏蔵」印記。「掃葉山／房蔵書」（東條一堂）印。十行二十字字面高さ約十八糎。朝川善庵は天明一～嘉永二。片山兼山の子。山本北山を師とし、考証学的背景を持つ経学者である。本書は伝鈔本がやや流伝し、刊本も存在したようである。

五八　左伝輯釈二十五巻附総論　巻二十補配後掲後印本　安井息軒撰　明治四年序刊（彦根藩井伊氏春風館蔵版）　批入多

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。安井息軒は寛政十一～明治九の儒者で、宮崎の人。松崎慊堂に師事し、昌平校教授。幕末の考証学の大家で、『論語集説』『孟子定本』等、名著が多い。漢唐の古注釈に依りながら、綿密な考証を加えるのが学問の姿勢であった。拙著『安井文庫研究』（本論集三十五～三十七）を参照。根本博士は明治六年に秋田から上京、息軒と議論を交わしている。赤色の封面に「春風館蔵版」、奥付に「井伊氏蔵版、発売書林、山中市兵衛・石塚保太郎」とあり。博士の書き入れが甚だ多い。黒沢四如など秋田版の儒者の説を紹介し、また、皆川淇園の説も多く引き、自説を展開するが、概ね安井氏の説に対しては穏便である。

五九　又　缺巻一至六　明治八年印（大阪、前川善兵衛等）

根本氏印無し。奥付に「明治八年八月求版」出版人は前川前兵衛等三肆。明治二十五年三島中洲門下、篁堂岩佐文之助の購書識語がある。

六〇　増続大広益会玉篇大全十巻首一巻　毛利貞斎撰　嘉永七年刊（大阪、柳原喜兵衛等）　五刻　薄葉絹表紙

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。扉に五刻とあり。毛利貞斎は元禄時代頃に活躍した京都の儒者。初学に解説した経書は、『四書集注俚諺鈔』等の「俚諺」のシリーズとして一世を風靡した。四十九、『大広益会玉篇』の形態を模して和訓を施した漢字字書。江戸時代屈指のベストセラーである。

五、史書類

一　史記百三十巻附史記補（磐舩活版史記）　漢司馬遷撰　寛政四年刊（磐舟　村上藩）　木活字印

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。原装。首に磐舟郡村上藩文学臣服　元？の序がある。注の無い正文本。左右双辺有界十行十七字、単黒魚尾、匡郭内縦二十・八横十五糎。上象鼻「史記正文」。本版は木活字版で、版心は一個の活字の如く連続している。根本博士の書き入れもあるが、それ以前の書き入れもある。

二　史記百三十巻附三皇本紀一巻首目一巻　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　張守節正義　（三）司馬貞撰（首）張守節撰　明万暦二十四年南京国子監刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。所謂、南監本二十一史の一、首に「南京国子監新鐫史記序」（馮夢禎）、「南雍重刻史記序」（黄汝良）あり。左右双辺十行二十一字、匡郭内縦十九・五横十四・二糎、単黒魚尾、上象鼻に「万暦二十四年」とあ

り。下象鼻に大小字数と刻工名あり。刻工は、戴孝・晏述・何鯨・王志・翁正・金科・楊元など多数。日本の江戸時代前期頃の丹表紙に改装されている。

三　史記百三十卷附三皇本紀一卷首目一卷　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隱　張守節正義　（三）司馬貞撰　清刊（羊城、駒氏翰墨園）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。四周双辺有界十一行二十二字黒口双黒魚尾。根本博士の書き入れが少々。封面に「羊城駒氏翰墨園重栞」とあり。

四　古香齋鑑賞袖珍史記一百三十卷附史記正義論例諡法解列國分野補史記　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隱　張守節正義　（諡）張守節撰　（補）司馬貞撰　清光緒八年刊

「根本／氏蔵」印記あり。中本　根本博士書き入れ多し。

五　史記論文一百三十卷　漢司馬遷撰　清・見思評點・呉興祚參訂　文政九年刊（小田原藩天游園藏版）覆刻清刻本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に「畔柳／蔵書」印。封面に「大日本文政丙戌翻刻」「天游園蔵版」、康熙三十五年の呉興祚の序あり。左右双辺有界九行二十一字白口単黒魚尾。句点・傍点・圏点を刻す。博士の書き入れあり。「太史公自序」の末尾に「余毎読之、未嘗不廃書而歎也。余深悲太史公之意。明治三十六年七月二十日行年八十二羽嶽根本通明」と墨識あり。

六　史漢愚按四卷　明郝敬撰　郝洪範校　寫本

根本氏印なし。首は「[敬]山草堂集第十　内編」と題す。刊本の写し。十四―二、『三十六變筮法附左傳國語艮之八泰八筮法』

の付録の筆跡と同筆。根本氏が写させた（令写）ものであろう。『四庫全書総目』の「正史類存目」に『史記瑣瑣』二巻を載せる。

七　史記注補正（史記補注）　清方苞撰　程崟等校　清刊

根本氏印なし。左右双辺有界九行十九字。単黒魚尾。方苞は安徽桐城の人。一六六八～一七四九。桐城古文派の祖。『望溪文集』あり。

八　漢書評林一百巻首目一冊　闕巻一至三、五十九至八十五、九〇至一百　漢班固撰　唐顔師古注　明凌稚隆校　明暦二年刊

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れはない。首末が欠けているが、本版は一版しかなく、京都の松柏堂出雲寺和泉掾の刊刻になるものである。

九　逸周書十巻附校正、補遺、附録　晉孔晁注　天保二年刊（彦根藩弘道館）木活字印　翻刻盧氏抱經堂校刊本

「根本／氏蔵」印記あり。「弘道／館／蔵版」の印がある。原装。本書は別名『汲冢周書』。西晋（司馬氏・二六五～三一六）の時、汲郡の人、不準が魏の安釐王の墓から得た古代の歴史書。周代の号令等を記しているので、宋代の書目『直斎書録解題』は『書経』と同じ書類に分類する。後に『四庫全書総目』では別史類に分類し、漢代から存在していた『周書』（『漢書藝文志』に『周書七十一篇』とある）であり、汲冢から得た書では無いとし、「旧本題」として『汲冢周書』の書名を取らない。本版は、盧氏抱經堂校刊本と全く同じ内容で、元至正の黄玢・明嘉靖の楊慎・清姜士昌の序を付し、「逸周書讎校所据旧本並校人姓名」を加え、末に校正補遺、付録を附す。九行二十字左右双辺匡郭内縦二十・九横十五・一糎。白口単黒魚尾。文政九年（一八二六）の彦根藩文学西郷義の跋がある。天保二年の刊記はやや墨が本文と馴染まず、後のスタンプかも知れない。

一〇　国語二十一巻　呉韋昭注　明嘉靖十五年跋刊（閩、葉邦栄）　批入多　白綿紙

「根本／氏蔵」印記あり。書名は尾題を取る。首に唐枢の序、末に葉邦栄の跋あり。各巻の首第一行に「閩中　葉邦栄校刊」とあり。十行二十字四周双辺白口双白魚尾。根本博士の書き入れが多い。『隋書経籍史』以来、雑史の分類に入る。『春秋外伝』とも言われる。韋昭注本はまた、『国語解』とも称し、現存のテキストは比較的多い。静嘉堂文庫に所蔵される明の毛氏汲古閣が、宋版を写した影宋抄本が最も古いテキストで、清の黄丕烈はそれを覆刻した。天聖明道本国語と言われるもので、次に挙げるものがそれである。

十一　国語二十一巻附校刊明道本韋氏解国語札記　呉韋昭注　清嘉慶五年刊（黄氏読未見書齋）覆刻宋天聖明道刊本　渋江抽齋旧蔵

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れが多い。他に、「弘前医官渋／江氏蔵書記」「高島氏／図書記」印記あり。渋江抽斎は医者であり書誌学者である。文化一年（一八〇四）生、安政五年（一八五八）没。狩谷棭斎が主催した古書鑑定会に関わり、『経籍訪古志』の編纂に寄与した。市野迷庵・伊沢蘭軒に師事した。蔵書は甚だ富み、没後散逸した。後補の茶表紙（康熙綴）は渋江氏の手になるか。古い帙は清国のものであろう。帙の題箋「天聖明道本国語附攷証」は清の原題箋で、「士礼居蔵」（一部破損）のように見えるが、あるいは黄丕烈（士礼居）の旧蔵か。首の封面に「嘉慶庚申（五年＝一八〇〇）読未見書斎重雕」とある。読未見書斎は黄丕烈の号。錢大昕・段玉裁の序あり。韋昭の原序を附し、「国語巻第一／周語上　　韋氏解」と題す。左右双辺十一行二十二字注小字双行三十三字。白口無魚尾。巻末に「天聖七年七月二十日開印」「明道二年四月初五日得真本凡刊正増減」と原刊記をのこす。末に「校刊明道本韋氏解国語札記」一巻（黄丕烈撰）を附す。最末尾に木記あり。「嘉慶庚申呉門黄氏読未／見書斎開彫同邑李福書」。江戸時代文化一年に葛氏上善堂が本版を覆刻している。

十二　国語二十一巻　存巻十四至二十一　呉韋昭注　宋宋庠補音　明穆文熙評　林羅山點　江戸時代前期刊　標注本

「根本／子龍／図書」印記あり。また、「根本氏図書」と博士が朱書する。明代のテキストで、比較的流布したものを羅山の訓点で覆刻したものである。

十三　戦国策十巻　宋鮑彪注　元呉師道校　清刊（文盛堂蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れが少々。封面に「文盛堂蔵版」、扉に「乾隆乙酉（三十）重刊」とある。四周単辺有界十行二十一字。『戦国策』は『国語』に次ぐ雑史類の史書で、漢の劉向が種々の資料を整理して一書にまとめたものと言われる。もと三十三巻であった。宋の晁公武『郡斎読書志』では子部縦横家に分類するが、『四庫全書総目』ではその分類を非とする。注解は漢の高誘が注したのにはじまるが、高誘注は宋代までに残缺となり、宋の姚宏がこれを輯纂した。これを姚本と言う。また同じ宋代に鮑彪が注釈を加え、十巻本にまとめたものが、鮑本と呼ばれるものである。元代に至って、蘭溪（浙江）の呉師道（一二八三～一三四四）が姚本・鮑本を校訂、更に補正を加えたテキストが乃ち本書である。『四庫全書総目』も本書をもって、戦国策注本の最善なるものと評している。因みに姚本は宋紹興間（一一三一～六二）の刊本が、鮑本は宋紹熙二年（一一九一）刊本が、そして呉本は元至正二十五年（一三六五）刊本が最早で、いずれも中国国家図書館に蔵される。こうした複雑な伝来を持つ本書であるが、『全釈漢文体系』（集英社・昭和五十年）の『戦国策』の解説（近藤光男著）が明解である。

十四　竹書紀年二巻　梁沈約注　明呉琯校　天明七年刊後印（大坂、北尾墨香居藤屋禹三郎）

「根本／氏蔵」印記あり。根本博士の書き入れは無い。明の呉琯は隆慶年間の進士で、『唐詩紀』等を編纂している。明の学者は好んで逸書の輯逸を行った。本書は呉琯の編纂した叢書『古今逸史』に収められるものを覆刻したものである。そもそも古代の王（戦国魏の襄王）の墓中より出た歴史書ゆえ、信憑性を疑う説があり、沈約（四四一～五一三）も南朝（宋・斉・梁）に仕えた才

人で、仮託として「旧題梁沈約注」とするのが主流である。寛延三年（一七五〇）に富山藩儒、三浦瓶山の校訂序文がある。幕末まで刷られた程流布した。版木は一種のようで、寛延三年序刊天明七年印とするべきか。左右双辺有界十行二十字、匡郭縦十九・六横十二・八糎。白口。末に崇高堂主人の跋がある。「天明七年大阪書肆」と刊記あり、墨香居の宣伝が二葉ある。

十五　大明律三十卷部題一卷附律例類抄　明劉惟謙等奉敕撰　應朝卿校　明万曆間刊　九行二十字　立教館白河文庫旧蔵　白紙

根本氏の印なし。博士の書き入れが頗る多い。明代の刑法書で、史部政書類・法令に分類される。『四庫全書』には未収。清代の律・日本・朝鮮に大きな影響を与えた書。日本の江戸時代、荻生徂徠の訓点で享保八年（一七二三）に出版されて、夥しく印刷された。恐らく各藩校の必携書であったのであろう。徂徠学派は、明代の書物を重視し、和歌山藩や鶴岡藩等の有力な徂徠学派の藩校では、大明会典の訓読等、大事業が営まれていた。明刻本は比較的多いが、その版種の異同は定かではない。本書の表紙は日本改装。末に「万暦辛丑（二十九・一六〇一）秋巡塩両淮監察御史臣応朝卿校増／揚州府知府臣楊洵同校」とあり。太字縦長の字様は萬暦の風格。「白河文庫」「立教館／図書印」「桑名文庫」印記があり、寛政の改革の松平定信（一七五八～一八二九）楽翁旧蔵書。

十六　読礼通考一百二十卷　清徐乾学撰　清康熙三十五年序刊　加治関氏蔵書印

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。徐乾学は江蘇昆山の人。明崇禎四年～清康熙三十三年。清康熙九年の進士。官は刑部尚書に至る。蔵書楼伝是楼は清初第一の富を誇る。本書は『四庫全書』礼類二、儀礼の属に収載される。各代の礼書礼説を独自に編纂し直したもの。『四庫全書総目』は古今の喪礼において本書を第一とする。

十七　五礼通考二百六十二巻首四巻　清秦蕙田撰　方観承訂　盧見曾・宋宗元校　清乾隆間刊（味経窩蔵版）　加治関氏藏書印

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。秦蕙田は江蘇金匱の人。康熙四十一年～乾隆二十九年。乾隆一年の進士。官は刑部尚書に至る。本書は前書徐氏の体例に倣って、吉嘉賓軍凶の五礼について各代（古代から明代）に分類して出典を示した総合的礼書である。『四庫全書』は礼類四・通礼の属に収載する。乾隆十八年の蔣汾功・方観承・秦氏の序を冠し、「礼経作述源流」「礼制因革」各二巻を附す。版式は、左右双辺十三行二十一字、白口単魚尾。匡郭内は縦十八・四横十四糎。盧見曾の雅雨堂叢書の版式に良く似、乾隆刊本の上乗である。博士の書き入れはない。

十八　清嘉録十二巻　清顧禄撰　安原方斎校　天保八年序刊（知言館蔵版）覆刻清道光十年刊本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れあり。封面に「知言館蔵」とあり。奥付に「道光原刻、天保翻刻」とあり。顧禄は江蘇呉県の文人。本書は蘇州の歳時記で、平凡社の東洋文庫四九一に中村喬の訳注がある。

一九　得一録十二巻　清余治編　清同治八年刊

根本氏印なし。本書は章程（規約）を集めたものである。封面に「同治己巳秋八月」とあり。同治八年の序文あり。

二〇　積古斎鐘鼎彝器款識十巻　清阮元撰　清光緒十四年刊（常熟、鮑氏後知不足齋）

阮元は江蘇儀徴の人。乾隆二十九年～道光二十九年。同好の諸氏とともに集めた古代鐘鼎の款識集成。本書は阮氏文選楼叢書に収載し、後、『皇清經解』にも含まれる。博士の蔵印書き入れなし。

二十一　欽定四庫全書簡明目録二十巻　清于敏中等奉敕撰　清刊　寺田望南旧蔵

「根本／氏蔵」印記あり。『四庫全書総目』を簡略にしたもの。本書には覆刻本が存在し、版種の確定は困難を伴う。「読杜／草堂」「寺田／盛業」「薩摩国鹿児／島郡寺田平／氏静節山房／清秘図書記」「東京溜池霊／南街第六号／読杜草堂主／寺田盛業印記」といった印記があるが、蒐集家寺田望南の印記。寺田氏は薩摩の人で、同郷の重野成斎のよしみで岩崎家に関係した。書誌学者島田翰と同様に活躍したようである。手を経た書は悉く善本で、様々な評判はあるが、寺田氏の蔵印は善本の代名詞と言っても過言ではない。根本博士は、学問上必要な漢籍は過不足なく整えられたが、一つ一つの書に書誌学上、血筋の良いものを揃えているのは、誠に奥ゆかしいと言わねばならない。

二十二　彙刻書目（甲至癸　並補）　清顧脩撰　文政一年刊（昌平坂学問所蔵版）官版　覆刻清嘉慶四年序刊本

最初の叢書目録。現在は『中国叢書綜録』を用いるが、以前は之に依った。根本博士書き入れあり。封面・刊記に「文政元年刊」とあり、奥付に「学問所御蔵版　製本頒行所和泉屋庄次郎」。顧脩は浙江石門の人。本書は光緒年間、朱学勤（浙江仁和の人、一八二三～一八七五・結一廬）が補ったものが流布した。

二十三　彙刻書目外集（礼楽射御書数　並補）　松澤老泉編　文政三年刊（江戸、慶元堂和泉屋庄次郎）

松澤老泉は慶元堂の和泉屋庄次郎。和泉屋は学問所のご用達の本屋であるが、学深く、前書を補って『外集』と名付け出版した。奥付に文政三年の刊年を記し、京都の植村・大阪の秋田屋・河内屋との連合出版であった。

二十四　戦国策百一集　鈴木汪撰　写本

「根本／氏蔵」印記あり。「明徳／館図書章」（陰刻）。本文書写者は複数。首に「文化丁卯孟春　羽州秋田教授鈴木汪」の序あり。

後人が十五巻に分ける。

二十五　同　同　天保八年写（胤昌）

「根本／氏蔵」印記あり。十四行の罫紙に十八行詰めで写す。毎冊尾に「天保八年胤昌写之」と墨書あり。本文一筆。朱点、欄外書き入れ多し。

二十六　国史略五巻　巌垣東園撰　文政九年刊（江戸、五車楼菱屋孫兵衛）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。封面版心に「五車楼梓」とあり。巌垣東園は安永三～嘉永二、京都の儒者で、龍渓の養子、中世以来の博士家伏原宣光を師とし、龍渓はまた皆川淇園の門でもあり、根本博士の重んじる学統を汲む人である。本書は日本の歴史を漢文で記したもの。

二十七　国史綜覧稿十巻　重野成斎撰　明治三十九年刊（東京、静嘉堂文庫）　鉛印　有図

根本氏印記は無い。重野成斎は本名安繹（やすつぐ）。文政十～明治四十三。薩摩の出身。明治政府の修史館編修。帝国大学教授。近代日本の歴史学の祖で、大日本編年史の編纂にあたる。岩崎氏は重野氏の事業達成のために、静嘉堂文庫に招き史料の蒐集に便を与えた。本書はその成果の一部である。

六、老荘類

一　老子翼二巻　明焦竑編　王元貞校　明萬暦十六年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れは無い。後出の『荘子翼』と対に行われたもの。焦竑は明、嘉靖萬暦の人。江寧の人。一五四一～一六二〇。左右双辺有界十行二十字、匡郭内縦二十・二横十三糎。本文の句読を刻す。

二　同　六巻　明焦竑編　王元貞校　江戸前期刊　翻刻明刻本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。前記の明刊本の翻刻。版式を変え、九行二十字とし、無界で訓点（返り点・送りがな）を刻す。博士の書き入れが少々ある。

三　老子通二巻荘子通十巻　明沈一貫撰　明萬暦二十七年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れが頗る多い。沈一貫は浙江鄞県の人。一五三一～一六一五。隆慶二年の進士。萬暦二十七年の屠隆緯の序がある。四周双辺有界十行二十字、匡郭内縦二十一・三横十四・三糎。本版は稀見に属す。根本博士の蔵書『和漢年契』（十八―十）に本書の成立年が書き入れられ、博士の愛用書であったことが伺える。

四　老子章義二巻　清姚鼐撰　清同治九年刊（桐城呉氏）

根本博士の印は無い。封面に「同治庚午冬桐城／呉氏重付刊於／上独山莫友芝検」とある。乾隆の姚氏の序、嘉慶二十三年の呉啓昌の跋がある。姚鼐は安徽桐城の人。一七三一～一八一五。乾隆二十八年の進士。所謂桐城派の文人で、『惜抱軒全集』を著す。莫友芝（一八一一～一八七一）は貴州独山の人。清末は署検題の習慣があり、蔵書の名家である莫氏の署検は多い。

五　荘子南華真経三巻附荘子内篇難字音義　晋郭象注単経本　明末刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。郭象の注本によった本文だけのテキスト。九行十八字、匡郭内は縦一九・六横一二・九糎。白口白魚尾。郭象は二五二？～三一二、河南の人。老荘を好んだ玄学の名人。竹林の七賢の一人、向秀（二二七？～二七二）の荘子注を敷衍したものと言われる。荘子の注では最もよく読まれたものである。

六　莊子南華真経十巻　晋郭象注　唐陸德明釈文　清光緒十一年刊（傳忠書局）仿宋重刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。唐の陸德明（五五七～六四一）の『経典釈文』の音義を附したテキストで、扉に「仿宋本精刻重刊」とある。

七　莊子翼八巻（巻八含莊子闕誤並附録）　明焦竑編　王元貞校（闕誤）宋陳碧虚撰　明萬暦十六年序刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れが少々。本書は江戸時代前期、承応年間に翻刻されている。

八　新鍥南華真経三註大全二十一巻　明陳懿典編　明萬暦二十一年刊（閩、自新斎余良木）

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れは無い。陳懿典は浙江秀水の人。萬暦二十年の進士。本書も江戸時代前期に翻刻されている。内題は巻一のみ「新」字が無い。封面に「書林　余翼我梓行」、版心下象鼻に「自新斎」と見える。巻末に「萬暦癸巳歳冬月／自新（以下破損）梓」と牌記がある。単辺有界十行十九字、白口双黒魚尾、匡郭内縦十五・九横十二糎。上層四・五糎。もと十冊を五冊に合訂したもの。

九　莊子内篇註七巻　明釈德清撰　森田信澄校　森田氏写本（一部異筆）

博士の印は無い。明の德清の注釈を鈔写したもので、書写者は二手か。文化一年七月の止止斎森信澄の序があり、末に文化改元季秋　藤維福の跋がある。末には、「摹写自六月二十八日至七月／十七日校自十八日至八月五／日　森田富次郎」と本文の一部分の手と同筆の奥書がある。

一〇　莊子因六巻　清林雲銘評述　楊攀梅重訂　清刊（益智堂蔵版）　覆刻

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。封面に「益智堂蔵版」とあり。本書は江戸時代後期、寛政年間に翻刻されている。

一一　莊子十二巻（莊子解）　存巻一至四　清呉世尚註評　写本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。また、「伊東／蔵書」印記あり。首に雍正丙午秋九月乙巳の序あり。薄葉を用いる。

一二　莊子七巻　存逍遙遊至応帝王　闕名者集注　写（函碕文庫用箋）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。郭象注・莊子因・莊子翼等の諸書より引用抜粋して自らの学習の控えとしたテキストで、函碕文庫用箋は比較的多く見られる近代の罫紙で、誰のものかは後考を待つ。

七、諸家類

一　荀子断四巻　冢田大峰撰　寛政七年刊（京、水玉堂葛西市郎兵衛）

根本氏印記なし。書き入れもない。封面に「平安書肆　水玉堂梓」、奥付に「寛政七年己卯春二月穀旦／平安書林　寺町通…葛西市郎兵衛」とあり。冢田大峰は名古屋藩儒、延享二～天保三。雄風館。荀子の研究は有名で、文化三年には『荀子正文』も出版している。江戸時代の荀子研究は、他に、荻生徂徠『読荀子』、桃白鹿『荀子遺秉』、猪飼彦博『荀子補遺』、久保筑水『荀子増注』、朝川善庵『荀子校勘記』等がある。藤川正数『荀子注釈史上における邦儒の活動』（風間書房・昭和五十五）参照。

二　羅近溪先生語要　明羅汝芳撰　陶望齢編　清光緒二十年刊（江寧府城）　覆刻

根本氏印記なし。書き入れもない。羅汝芳（一五一五～一五八八）は江西南城の人。嘉靖三十二年の進士。王陽明の心学を奉じる顔鈞などの泰州学派に属する思想家。山陰何光道の跋あり。刊記に「光緒二十年歳次甲午江寧府城重刊」と。

三　十駕斎養新録二十巻　闕巻十七至二十　清銭大昕撰　清刊

根本氏印なし。銭大昕は江蘇嘉定の人。一七二八～一八〇四。乾隆十九年の進士。清朝考証学の大家。一九九七年江蘇古籍出版社から『嘉定銭大昕全集』（標点本）が出されている。「黒川氏／図書記」印記あり。黒川春村の旧蔵。春村は幕末の国学者で考証家。寛政十一～慶応二。清水浜臣・伴信友等とともに考証国学派の主流。

四　孫子十家註十三巻附孫子敍録・孫子遺説　宋吉天保編　清孫星衍・呉人驥校　（遺）宋鄭友賢撰　（敍）清畢以珣撰　清末刊　覆刻清咸豐五年淡香斎木活字刊本

「根本／氏蔵」印記あり。封面に「咸豊乙卯仲冬淡香斎擺字板」とあり、もとは活字板でそれを覆刻したものらしい。ただし刻字は拙である。『孫子』は周の孫武の作と言われ、魏の武帝（曹操）の注等が伝わっている。宋刊本『十一家注孫子』（北京・上海各館所蔵）以来、『孫子集注』等とも題して読まれた。博士の書き入れあり。

五　増補武経（七書）集注大全七巻首目一巻　清王式玉編　林嗣環・銭登峰閲　元録十四年刊（江戸、松葉軒萬屋清兵衛）　覆刻清還読斎蔵版　二段本　訓点本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。「敬義斎」（丸印）あり。博士の書き入れがある。「還読斎蔵版」の封面も清版のものを覆刻している。武経七書は『孫子』『呉子』『司馬法』『三略』『尉繚子』『李衛公問対』『六韜』の兵書。『七書』の江戸時代

における出版はかなり多い。

六　韓非子二十巻（乾道本韓非子）　山田政德等校　弘化二年刊（平戸、修道舘蔵版）　覆刻清嘉慶間覆宋乾道一年黄三八郎刊本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。江戸時代における韓非子研究は、蒲坂青荘『韓非子纂聞』太田善斎『韓非子翼毳』津田鳳卿『韓非子解詁全書』など多くはない。本書は後出の『韓非子識誤』と同時に印刷されたもので、現在失われている宋乾道刊本を清嘉慶年間に呉鼐が覆刻したものの、さらに覆刻である。顧千里（広圻）（一七六六～一八三五）は清朝第一の校勘学家。幕末の校勘学の隆盛をよく表した出版で、朝川善庵の監修で善庵の男が校正に与っている。

七　韓非子識誤三巻　清顧広圻撰　弘化年間刊（平戸、修道舘蔵版）

前書と対の一書。表紙も同じ。「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。

八　太玄十巻（太元経）　宋司馬光集注　清光緒一年刊（湖北、崇文書局）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。書き入れはない。封面版心は『太元経』と題す。『太玄経』は漢の揚雄（前五三～一八）の編纂する術数の書。宋の司馬光（一〇一九～一〇六七）が注したテキストで、司馬光はこれに類した『潛虚』なる書をも著している。

九　標題徐状元補注蒙求八巻（頭書蒙求）　唐李瀚撰　宋徐子光注　闕名頭書　承應三年刊

縹色の原装表紙（縦二七・七横一九・五糎）。根本氏印はないが書き入れは少々ある。子部雑家雑纂類に分類するが、書目によって分類は一定しない。『四庫全書総目』は子部類書類に分類し、作者の李瀚を晋人と誤考している。余嘉錫（『提要弁証』）・胡玉縉

（『提要補正』）いずれも唐人にするが、同一人物ではない。『蒙求』は中国では伝本少なく、山西省応県から、遼代の無注本が発掘され、他に宋刊本が二本あるのみで、その後全く読まれぬ佚書となった。日本では多く読まれ、江戸時代の出版量は夥しい。本版は頭注本でこの一版のみである。

一〇　**居家必用事類全集（甲集至癸集）二十巻　闕名編　明洪方泉校　寛文十三年刊（京、松柏堂）覆刻明嘉靖三十九年序刊本**

「根本／氏蔵」印記あり。首に田汝成の序文がある。刊記に「寛文十三癸丑年夷則上旬／洛下林前和泉掾白水／于松柏堂刊之」とある。中国に明刊本の伝来は多く、この和刻本の底本を同定するのは難しいが、今は序文の年号を取って覆刻の底本とする。本書は子部雑家類の雑品に分類され、『四庫全書総目』では「雑家類存目七」に著録。歴代名賢の格訓集で、元人の著作らしいが著者は定かでない。こうした書の研究に『日用類書集成』（汲古書院）がある。「阿波国文庫」印記がある。徳島藩主蜂須賀家の旧蔵書である。

一一　**劉氏鴻書一百八巻序目一巻　明劉仲達編　湯賓尹刪正　明萬暦三十九年序刊**

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。明の焦竑・李維楨・顧起元・湯賓尹の序を附す。前書と同じく、『四庫全書総目』では「類書類存目二」と存目に著録。中国では明刻本甚だ多く、版の異同は検討を必要とする。単辺有界十行二十一字白口白魚尾、版心下に刻工あり、「晴・兪・玉・朱」等である。内容は二十四類に分類、更に細目に分かつが、博士は墨筆で分類を表紙に書写している。

一二　**新刊古今類書纂要十二巻　明璩崑玉撰　葉文懋校　江戸前期刊　享保十四年印（京、額田正三郎）覆刻明天啓一年序刊本**

「根本／氏蔵」印記あり。本書は四庫全書未収。元となった明版も未見である。巻十二尾題の前に「享保十四年己酉歳三伏吉旦

求之／京師書舗　額田正三郎蔵版」と刊記がある。これは版木を求版した際の、入れ木。末に額田氏の「一止人蔵版書目録」がある。本版は寛文九年に山形屋が刷っているもの。博士の書き入れが少々。目録外題も博士の墨書。

一三　酔世錦囊称呼帖式三巻（雲林別野纂輯）、書啓四巻（尺牘新裁）、天下路程二巻、對聯（雋句）五巻、家礼纂要五巻　清謝梅林・鄒可庭編　清刊（雲林別野・経国堂蔵版）　明徳舘旧蔵

根本氏印記無し。「明徳／館図／書章」印記。秋田藩校の蔵印。諸事の簡便な手引き書である。封面あり。「雲林別野」「経国堂蔵版」とあり。

一四　五車韻瑞一百六十巻首一冊　明凌稚隆撰　明刊

根本氏印記無し。但し外題目録は博士が墨書する。料紙は竹紙であるが、重量感がある。『四庫全書総目』は子部類書類存目二に著録する。元陰時夫の『韻府群玉』に倣った類書。凌稚隆は『史記評林』『左伝評注測義』等を著した明後期の学者。本版は伝本甚だ多く、版種の比較同定は非常に困難である。日本では江戸時代前期に一版あるのみ。左右双辺十行、匡郭内縦二十二・一横十五・二糎、上層一・七糎。単黒魚尾、刻工名「陶、元」等。

八、集部書

一　六臣註文選六十巻　梁昭明太子蕭統撰　唐李善・呂延済・劉良・張銑・呂向・李周翰注　明刊　乎古止点古訓点移録本　多紀元堅手跋

『文選』は揚州江都の人、李善（六三〇？～六八九）の注した李善注本と呂延済等が注した五臣注本（三十巻）、それらを合刻した六臣注本の三種に分かれる。版種は六臣注が、宋の明州（浙江省）、贛州（江西省）の両刻本、また蜀刊本等を祖とし、李善注

本は、宋の池州（安徽省）刻本を祖とし、それぞれ元明清の翻刻本が林立する。五臣本は宋版が二種知られ、他に朝鮮版が伝来するぐらいで、一般の眼には触れない。本版は、九行十八字（匡郭内縦十九・九横十四・五糎）白口の明刊本で、版心の下に「黄珣、瑜、憲」等と刻工名が刻される。白紙印刷。恐らく、『蔵園訂補邵亭知見伝本書目』（一九九三・中華書局）に著録する「明刊本九行一八字本」に相当すると思われるが、伝本は稀である。本書は朱墨の古い訓点が書き入れで施されているのが貴重な資料で、ヲコト点もみえる。古訓点の移点であろう。また、第二十九冊に古い題箋の切れ端がある。末に次の跋文を書写する。

「右宋刻文選伝本甚／稀余家旧蔵係于永／伝子孫為家宝爾云／天保甲辰首夏　元堅／識于存誠薬室」

即ち、多紀元堅の手跋である。多紀元堅（寛政六～安政四）は、幕府医官、多紀元簡（桂山）の五男、号は茝庭、法印となって楽真院と称した。渋江抽斎・小嶋宝素・海保漁村等と親交あり、古書に通じ、『経籍訪古志』成立に多大な影響を及ぼした。これは、天保十五年（弘化一年）に記した跋である。

二　重訂文選集評十五巻首末各一巻附葉星衛附註　清于光華編　清嘉慶十二年刊（懐徳堂）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。封面に「嘉慶丁卯重鐫」「懐徳堂彫版」とあり。博士の書き入れは無い。

三　魁本大字諸儒箋解古文真宝前集三巻（標註補正古文前集）　海老名恒標註　安政二年跋刊（大坂、宋栄堂秋田屋太右衛門）

「根本／氏蔵」印記あり。『古文真宝』は編者未詳で宋元のころに成立した詩文の教科書で、中国では早く稀少となり、明版に若干伝本を止める程度であるが、日本ではよく読まれ、『三体詩』とともに室町時代から翻刻出版がとぎれなかった。徂徠学派による『唐詩選』の流行以降、ベストセラーの座を譲ることになるが、明治以後も必須の教科書として人口に膾炙した書物である。前集は詩、後集は文で、歴代の名品を分類してあつめている。『漢文大系』の二に後集を収載している。封面に安政二年と浪華宋栄楼の名がある。奥付に秋田屋等、三都十肆の名を連ねる。

四　魁本大字諸儒箋解古文真宝後集十巻　正保三年刊（豊興堂）　覆刻古活字本

根本氏印無し。慶長時代に出版された古活字版に依ったものである。豊興堂はこの頃、本書を何度か重版しているようであるが、その版の同異や詳細は明かでない。四周双辺無界九行十八字黒口双花魚尾。出典は陰刻。刊語は以下の通り。

「右之本依有文字並点錯乱而加／校合而刊之者也／正保三丙戌暦初冬上旬／書林豊興堂新梓刊」

五　魁本大字諸儒箋解古文真宝後集十巻　延宝八年刊（山本長兵衛）

根本氏印無し。扉の「古文後集」と。四周単辺無界八行十四字、匡郭内縦二十三・四（本文十四・六）横十六・五糎、白口単黒魚尾。末に「延宝戊午春三月壬辰東関城北雲庵生駒登長山謹跋」なる跋文あり。「徳江／蔵書」印あり。

六　古文真宝後集諺解大成二十巻　林羅山諺解　鵜飼石斎大成　寛文三年刊（京、村上平楽寺）後印

根本氏印無し。林羅山（天正十一～明暦三）の注釈を、鵜飼石斎（元和一～寛文四）が整理したもの。刊記は「寛文三稔癸卯十一月吉旦／二條通玉屋町村上平楽寺開板之」と。石斎の跋文あり。

七　瀛奎律髄三巻　元方回編　朝川善庵校　文化五年刊（京、朝倉儀助・植村藤右衛門）

根本氏印無し。本書は唐宋の詩を集めたもので、日本では江戸時代前期に村上平楽寺が出版して以来、出版されず、文化年間に横本で読みやすい流布本として再び出現した。朝川善庵（天明一～嘉永二）は江戸後期の考証学者片山兼山の男で、山本北山門下。文献に通じた江戸時代後期を代表する堅実な儒者である。山本北山序・自序あり。大窪詩仏の跋あり。奥付は江戸・浪華・尾州の三都書肆が名を連ねる。

八　韓文起十巻　唐韓愈撰　清林雲銘編註　秦滄浪標註　文政六年刊後印（尾州、永楽屋東四郎）　佐藤硯湖旧蔵

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に「尚古／斎／所蔵」印記あり。韓愈（七六八～八二四）の詩文は柳宗元（七七三～八一九）の詩文とともに江戸前期に出版、その後、幕末に昌平校で新たに出版した。本書は名古屋の儒者秦鼎が整理、注を加えたもの。封面に文政癸未、奥付に永楽屋等四都十三名が連ねる。

九　林子（林子全集）　元字函十冊（闕第一冊）亨字函十冊（闕第七、八冊）　利字函十冊　貞字函十冊　明林兆恩撰　明刊

「根本／氏蔵」印記あり。博士書き入れ本。林兆恩は明福建莆田の人。儒・仏・道の三教合一を唱えた。『四庫全書総目』子部雑家類存目二に収載。四周双辺有界九行十七字、匡郭内縦十八・五横十三・三糎、単魚尾。浙江省図書館所蔵に、九行十九字本と九行十七字本があり、本版は後者に相当する。博士は明のこうした著作を比較的好まれたようである。

一〇　黄漳浦集五十巻首一巻年譜目録各二巻（明漳浦黄忠端公全集）　明黄道周撰　清陳寿祺編（年）　荘起儁編　清道光十四年序刊

「根本／氏蔵」印記あり。他に「吉田氏／図書記」印あり。黄道周（一五八五～一六四六）は福建漳浦の人。天啓二年の進士。『明儒学案』巻五十六に収める。石斎先生と呼ばれた。後に、叢書十―十一に『石斎先生経伝九種』が見える。本書にも根本博士の書き入れがあり、博士は明人の著作に関心を持たれたようである。

一一　宛丘遺集十巻　朝鮮　宛丘撰　朝鮮刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。茶色の原表紙（縦三十一・五横十九糎）に朝鮮人の手で外題を記す。目録四丁。巻頭は、「宛丘遺集巻一／男縉綽絢　編校／　雑著／…」とあり。左右双辺無界九行十八字、匡郭内縦二十・二横十三糎。白口単

魚尾。「井井／居士／珍蔵」「竹添／光鴻」印あり。字体精堅。

一二　甕谷遺稿八巻　岡松甕谷撰　明治三十九年二月刊（東京、吉川弘文館）　鉛印

根本氏印なし。岡松甕谷（文化十三～明治二十八）は豊後高田の人で、帆足万里の門下、熊本藩儒から昌平校教授。この歳の十月に博士は逝去している。

九、古活字版類

一、五経　慶長時代刊　古活字印

周易九巻
尚書十三巻
毛詩二十巻
春秋経不分巻
禮記二十巻

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。『周易』『禮記』のみに根本博士の書き入れがある。十六世紀の末期、文禄・慶長・元和頃に大量に出版された木活字による出版物（古活字版）の一つで、本書は『五経』を合刻したもの。正文（経文）のみで、注釈は省いているが、漢・魏晋の古注本に依ったもので宋以後の新注本に依ったものではないと見られる。『五経』が揃っているのは根本博士本のみである。そもそもこの無注本は伝本稀で、『周易』『春秋』『毛詩』は本書のみ。『尚書』と『禮記』はそれぞれ名古屋市蓬左文庫・西尾市岩瀬文庫に一本が現存し、いずれも徳川家康が御三家に分与した所謂、御譲本（おゆずり本）である。『毛詩』はお茶の水図書館成簀堂文庫（徳富蘇峰旧蔵）にも所在するが、八行本で本書とは別版である。また、古書肆・反町弘文

荘の書目に、宋以後の新注本に依ったと見られる別版の無注本『周易』『詩経』を載せるのみで、他に伝本を聞かない。

茶褐色の原表紙（縦二十九横二十糎）。それぞれ、巻一首（巻頭）は「周易上経乾伝第一」「尚書巻第一」「毛詩巻第一」「禮記巻第一」「春秋経」と題す。四周双辺有界七行十七字・粗黒口双花魚尾、匡郭内縦二十一・五横十五・五糎。『五経』を通じて一筆の訓点書き入れ（江戸前期頃）がある。書き入れは、全書に墨書の返り点・送りがな・縦点・声点・補注、『毛詩』以外に朱筆のヲコト点。『禮記』の巻六・七の末に、その書き入れと同筆にて寿永一・二年（一一八二・三）の清原良業、建治二年（一二七六）の清原良枝の元奥書が記される。清原家の訓点を移点したものであることがわかる。

二、周易十巻　魏王弼・晋韓康伯注（略例）魏王弼撰・唐邢璹注　慶長時代刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に、「発漢魏／書？宋諸／儒未達／之秘？」印あり。恐らく根本博士のものであろう。栗皮色表紙の原装（縦二十八・五横十九・五糎）に刷り題箋「周易　一之二」等とあり。巻頭は「周易上経乾伝第一」と題す。四周双辺有界七行十七字、粗黒口双黒魚尾、匡郭内縦二十・五横十四糎。巻十は「周易略例」。江戸時代前期頃の、朱墨の訓点書き入れがある。古活字版の『周易』は需要多く、かなり出版されたようで、版種も多岐に亘る。簡単に図式化すると以下のようになる。

A種（所謂伏見版）B種（無刊記本a、無刊記本b、以上別版）C種（今関正運刊有跋本、同有跋・修本、同無跋・修本、以上同版）D種（無刊記有跋本、無刊記無跋本、以上別版）

以上、つまり、四種、七版が現存するわけである。詳細については別稿に譲るが、根本博士の本版は、非常に複雑な一本で、D種無刊記有跋本ながら、跋文が無いもので（とは言え無刊記無跋本とは別種である）、蓬左文庫本と全く同じものである。この跋文とは慶長十年の涸轍の跋文で、同版ながら台北故宮博物院所蔵本には跋がついている。後に削去したものか、最初から意図的に附さなかったものか明かでないが、こうした伝本の存在は書誌学上貴重な資料である。『周易』古活字版のテキスト的価値につい

ては、阿部隆一博士の解説（『慶応義塾図書館蔵和漢書善本解題』昭和三十三年）に詳しい。中国で失われた宋版や日本の清原博士家の古写本に基づくきわめて質の高いテキストであることは、内外の学者の認めるところである。

三、尚書十三巻　漢孔安国伝　慶長時代刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。後補の縹色表紙（縦二十七・五横十九・七糎）。巻頭は「尚書巻第一」と題す。四周双辺有界八行十七字、匡郭内縦二十一横十六・五糎、大黒口双黒魚尾。本文のみに江戸時代の墨の訓点書き入れがある。古活字版の『尚書』は、四版知られ、版式上の形式で区別できる。即ち、版心が「粗黒口双花魚尾」が二種類、「大黒口双黒魚尾」、以上が八行本、それに「粗黒口双黒魚尾」の九行本である。本版は、「大黒口双黒魚尾」の八行本に属し、成簀堂文庫や斯道文庫に伝本がある。これも古抄本に基づいたテキストで、根本博士は『古文尚書』の価値について、本書に次のように書き入れている。

「『古文尚書』、出於壁中者、蔵于秘府、是無孔安国之伝也、至孝成之時、始立学官、尋廃矣、至東晋、孔安国所伝、真『古文尚書』始出矣、梅賾上其書、或曰猶缺舜典、隋開皇二年、得舜典、而後、『古文尚書』始備、是不然矣、（非舜典之缺、舜典在堯典之中也）東晋所出尚書、即孔子子孫、家蔵本也、前此、未嘗出于世、故賈馬鄭服之徒、皆未見真古文、鄭玄所注、漆書也、故杜預、注『左傳』、韋昭、注『国語』、趙岐、注『孟子』、凡所挙書、皆指為逸書、其実未嘗逸也、至唐貞観太宗、悉屏諸家伝注、而立孔伝、且命孔穎達諸儒、為之疏、太宗、知『古文尚書』之正也、」

四、毛詩二十巻　漢鄭玄箋　慶長時代刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に、「根本／通明」（陰刻）「羽嶽」印。茶表紙、縦二十八・二横十九・三糎。巻頭は「毛詩巻第一」。四周双辺有界八行十七字。匡郭縦二十七・九横二十一・四糎。巻十九は補写。その同じ筆で訓点、欄外補注を書き入れる。江戸時代前期頃の筆である。また、根本博士の朱点もある。『毛詩』の古活字版は、本文巻一首の一句「風化天

下而」の「化」字がある「有化字本」と「化字」の無い「無化字本」とがあり、「有化字本」には、版心が黒魚尾のものと花魚尾のものがある。本版は「有化字花魚尾本」に属し、伝本は三種のなかでは一番多い。根本博士の『詩経講義』本は「化」字が無い。博士は本書の表紙内側に次ぎのような評語を記す。

「『毛詩』古本有数種、皆亡於支那、而我邦伝之也。『毛詩』有木刻也旧矣。蓋在康治久安前後、此本為最古矣。其次則大外史清原家所伝進講本是也。承安四年九月十九日朝取進講本、加假字反切音訓、其後元応二年三月二十六日朝議大夫行直学士清原真人親題進講本曰、以家秘本終夜見合畢、暁鐘之間終功而已。清原氏所謂家秘本者、即此本是也。此本経伝古序往々有異文、読此本則可以知『毛詩』諸本悉有残缺也。清原氏以此本為宝秘、不亦宜乎。」

五、毛詩二十巻　漢鄭玄箋　慶長時代刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に、「根本／通明」（陰刻）「羽嶽」印。「聖人復／起不易／吾言矣」印も博士のもの。栗皮色表紙の原装。縦二十七・五横二十糎。本版は、「有化字黒魚尾本」に属する。成簀堂文庫等に同版が所在する。本版には詳細な清原家の訓点批校が書き移されている。根本博士が、四の『毛詩』に題した跋文に言う進講本とは、この移点の奥書から分かるものである。その移点の時期は江戸時代前期のころであろうか。更に、本書には文政天保年間に菅原聴長が進講に用いた奥書が記され（「紀伝世家」「菅原／聴長」印記もある）、また、万延一年に菅原任長が講読に用いた旨の奥書がある。以上三種の筆跡による書き入れがあり、『毛詩』訓点史の貴重な資料である。また、巻一七の首に「東坊／城蔵／書記」印記もある。

清原家の奥書

承安四年九月十九日朝間詰光眼加假字反音□　　毛鄭之説既以分別好槖之徒何不悦目乎　　大外史清　判

文永十年閏十月十四日見合或古本　　大外史

嘉禎二年三月十八日授良尚　　大外史清原　判

文永十年八月十三日於燈下授良枝　　大外史清原　判
永仁元年十一月十五日於燈下授宗尚　　助教清原　判
正安二年七月二十五日重授宗尚
嘉元三年九月六日晡時授頼元　　大外史　判
元亨四年六月九日晡時授良兼　　判
嘉暦二年九月二十四日授良氏　　判
暦応三年十月十九日授宗枝　　沙彌　判
貞治二年八月二十日授良賢　　博士　判
明徳元年十一月三日授頼季
永正十八年五月六日於甘露寺亜相亭講之　五ヶ度　　従三位清原宣賢
以上巻一末
元応二年三月二十六日以家秘本終夜見合畢暁鐘之間終功而已　　朝議大夫行直学士清原真人　判
同十一月三日加一是
大永元年十月九日於甘露寺亜相亭講尺　四ヶ度　　従三位清原宣賢
以上巻二末
天文四年六月二十一日講之
以上巻四末
天文四年六月二十七日講尺之　三ヶ度
以上巻五末

享禄四年九月二十八日　十月三日同六日　三ヶ度講尺　環翠軒宗尤
以上巻八末
文和四年十一月八日感習之年令相伝嫡孫主水正　良賢者也　沙彌真性　御判
享禄四年十月十三日十五日　十一月二日　三ヶ度講之　環翠軒宗尤　判
以上巻九末
享禄四年十一月四日六日八日　三ヶ度講之　環翠軒宗尤
以上巻十末
享禄五年五月四日七日九日　両度講之　環翠軒宗尤　（東）
以上巻十一末
享禄五年五月十一日十三日十五日十八日　四ヶ度講尺　環翠軒宗尤　（東）
巻十二末
応永二十七年後正月十三日授良宣　弟宗　御判
享禄五年五月二十二日二十四日二十六日　三ヶ度講之　環翠軒宗尤　（東）
以上巻十三末
享禄五年五月朔日三日五日　三ヶ度講畢　環翠軒宗尤　（東）
以上巻十四末
享禄五、六　天文二　正二十三同二十七日　三ヶ度講之　環翠軒宗尤　判
以上巻十五末
元応二年十一月十三日授申書儒　大外史　判

暦応四年二月八日授申直講殿畢　　直講清原宗尤
天文二年正月三十日二月二日同五日同九日　四ヶ度講之　　環翠軒宗尤　判
以上巻十六末
天文三年三月　五ヶ度講之　環翠軒宗尤
以上巻十七末
天文三年五月十一日講終　五ヶ度　環翠軒宗尤
以上巻十八末
菅原聴長の奥書
天保八年七月朔於　今上御前講之　正三位右大辨兼勘解由長官菅原聴長
以上巻二末
天保十年十月二十五日於　御前御小座□講尺　右大辨菅原聴長
以上巻十四末
此本宣賢卿手筆無相違者也　天台僧少僧都宗淵所贈予也　自五月五日迄今日授大膳大夫菅原熙畢
文政十一年六月十三日　右大辨勘ヶ由長官菅原　花押
天保十二年九月十九日授公睦朝臣了　右大辨　花押
以上巻二十末
菅原任長の奥書
万延元年閏三月二日於五條家会読　朝散大夫菅原任長
以上第一、二冊後表紙内側

六、論語十巻　魏何晏集解　慶長時代刊

後補絹布表紙縦二十七横十九・五糎　康熙綴じに包角を加える豪華な装丁。「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。本版の詳細は、拙稿（「慶長刊論語集解の研究」斯道文庫論集平成八年）を参照。古活字版の『論語』は幾種類か存在するが、同時代に同じ版式で出版された整版（活字ではない木版）には二種類ある。一は刊記のある、要法寺版と呼ばれるもので、一は無刊記本である。本書は無刊記本に相当するが、根本博士はその区別を知り、本書の末に「慈眼刊／正運刊」という要法寺版の刊記をわざわざ写し取っている。版種の鑑識を誤ると要法寺版としてしまう。本書は従って活字版ではないが、この頃の出版物はテキストの価値の上から、古活字版と同類と見なすべきである。本書にはまた、江戸時代の訓点書き入れがなされている。「師岡氏所蔵」の印記もある。

七、孟子十四巻　漢趙岐注　慶長時代刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。後補の栗皮色表紙、縦二十七・七横二十糎。古活字版の『孟子』は趙岐注本のテキストとしては最良のものに属する。中国の現存刊本ではすでに見ることができない字句の精確を有している。詳細は拙稿（「古活字版趙注孟子校記」斯道文庫論集平成五年）を参照。版種はかなり多く、七行本と八行本に大きく分かれる。更に、七行本には、今関正運刊本、慶長十二年以前刊本、慶長十七年以前刊本、下村正蔵刊本があり、八行本に二種類存在する。本版はそのうちの慶長十二年以前刊本に相当する。また、江戸時代初期頃の筆とおぼしき訓点の書き入れを存す。毎冊の末に「徳云」という署名を墨書する。

八、文選六十巻目一冊　梁昭明太子蕭統撰　唐五臣併李善注　寛永二年刊　翻直江版

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。縹色空押花紋表紙、縦二十九・五横二十一・七糎、原装。刷り題箋。四周単辺無

界十行二十二字、匡郭内縦二十三・二横十六・七糎。粗黒口双花魚尾。巻一の「昭明太子撰」の「明」字を朋に誤植する。米沢の家臣直江兼続が慶長十二年に宋版に依って、古活字版を出版した所謂、直江版『文選』の翻刻本である。末に宋の紹興二十八年の原跋があり、宋明州刊本に依っていることが分かる。刊記は、直江版の原刊記である「慶長丁未（十二年）…」を遺す。実はこの刊記の裏葉に寛永二年の刊記があるのだが、古い書肆の仕業で、巧みに半葉を削去切断し、慶長の直江版と偽ろうとしたものである。全巻に江戸時代前期の手とおぼしき訓点書き入れを存す。この時代の訓読は中世から近世へと学問が変化する途次のものであるから、両時代を見渡すことのできる貴重な訓読資料であるが、未だ綿密な研究には至っていない。

十、叢書類（経義類）

一、十三経註疏　明嘉靖年間刊（福建、李元陽）

周易兼義九巻附周易略例　魏王弼、晉韓康伯注　唐孔穎達正義　批入本

孝経註疏九巻　唐玄宗注　宋邢昺疏　多紀氏旧蔵

『十三経注疏』は、『易』から『孟子』までの十三種の、宋以前の古注・疏を合刻したもので、南宋光宗時（十二世紀末）両浙東路茶塩司刊刻の八行本を最古とし、その後、九行、十行本と宋・元間に相次いで出版され、元刊十行本が完存するものでは最も古い叢刻である。明代には北京の国子監が萬暦年間に（北監本）、福建の李元陽がまた閩中に、明末に汲古閣がそれぞれ出版した。清になると、これらを覆刻するものが現れ、嘉慶年間に阮元が元刊十行本を覆刻したものが流行した。本版李元陽本は閩本とも言われ、北監本よりは優れている。九行二十一字本である。二書の伝来は別である。「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の筆で表紙に「宋版」とあるが、宋版ではない。『孝経註疏』は栗皮表紙で、「多紀氏／図書印」がある。幕末の奥医師、多紀氏の印であろう。

二、十三経註疏　明毛晋校　明崇禎年間刊（汲古閣）

毛詩註疏二十巻　漢鄭玄箋　唐孔穎達疏　明毛晋校　崇禎三年刊　批入本

孝経註疏九巻　唐玄宗注　宋邢昺疏　崇禎二年刊　批入本

常熟の毛晋（一五九八～一六五九）の汲古閣は六百種もの出版を行った大出版家であるが、テキストの質もまた高かった。本版の初印本は美麗この上なく、本書も含め、後印本が殆どである。『毛詩註疏』は「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れが多い。『孝経註疏』は「根本／氏蔵」印記のみ。

三、十三経註疏　清嘉慶三年刊（金昌、書業堂）　覆刻明毛氏汲古閣刊本

春秋左伝註疏六十巻　闕巻一至四、十三至四十　晋杜預注　唐孔穎達疏　明毛晋校

春秋公羊伝二十八巻　漢何休注　唐徐彦疏

春秋穀梁伝註疏二十巻　晋范甯集解　唐楊士勛疏

爾雅註疏十一巻　晋郭璞注　宋邢昺疏

孟子註疏解経十四巻　漢趙岐注　宋孫奭疏　批入本

本版は汲古閣本の覆刻本で、これを原刻としている目録が多いのは、覆刻が精巧だからである。『春秋』三伝には印記書き入れなし。『爾雅』『孟子』には「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。『孟子』は博士の書き入れが多く、「漢晋古本存乎我邦／今以之正俗本之誤／根本通明」と首に朱書する。また、『公羊』『爾雅』には「読書／堂蔵」の印記がある。

四、十二経（秦刻十二経）　明秦鏷校　明刊　十三行二十四字

周易三巻附朱子図説、上下篇義

書経四巻
詩経四巻
周礼六巻
礼記六巻
春秋十七巻
論語二巻
大学、中庸章句各一巻
孟子七巻
孝経一巻（御注本）
小学二巻

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。本書は、外題（張滋昉題）をとって『十二経』としたが、もと『九経』と呼ばれるもので、この『九経』には二十行本の明刊本と、十三行本の明崇禎十三年錫山秦鏷求古斎刊本がある。『大学』『中庸』『小学』の三書は付録として扱われ、九経と言うことになるのである。その後、観成堂がその版を求版か覆刻かして印刷している。四周双辺有界十三行二十四字、匡郭内縦十三・二横九・八糎。上層には音注を附し約一糎、全文に句読を施す。『周易』『大学』『中庸』『小学』のみ宋学の朱熹序を附し、他は、古注の序を冠す。

五、御纂七経　清刊　尊経閣蔵版

欽定周官義疏四十八巻首一冊　清允祿等奉敕撰　批入多
欽定儀礼義疏四十八巻首二巻　同　同　批入多

欽定礼記義疏八十二巻首目一巻　同　同　批入本

『中国叢書綜録』によれば、康熙乾隆間に『御纂周易折中』『欽定書経伝説彙纂』『欽定詩経伝説彙纂』『欽定春秋伝説彙纂』と本書の三種『欽定三礼義疏』を併せ『御纂七経』として出版し、清末まで幾版も重版されている。『四庫全書』にも収載する。本版は、その何れかの重版の一つに属し、封面に「尊経閣蔵版」とあり、長沙の出版と思われる。「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れが多く、『欽定周官義疏』には、「鄭樵云、漢曰周官、江左曰周官礼、唐曰周礼、推本而言、則称周官、是。」等と書き入れにある。

六、同　右別版

欽定儀礼義疏四十八巻首二巻　存巻二十二至二十五

「根本／氏蔵」印記あり。字様は前者に比してこちらがやや良いか。

七、欽定四経　江戸時代後期刊（加賀藩学）覆刻清刊本

御纂周易折中二十二巻首一巻　清李光地等奉勅撰　批入本

欽定書経伝説彙纂二十一巻書序一巻首二巻　清王頊齢等奉勅撰

欽定詩経伝説彙纂二十一巻詩序二巻首二巻　闕巻一　清王鴻緒等奉勅撰

欽定春秋伝説彙纂三十八巻首二巻　清王掞等奉勅撰　批入本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。前述のように、七経を清朝に出版、江戸時代、加賀藩は四経のみをとり覆刻した。或いは他の三経も計画ありしも及ばなかったものか。江戸時代後期、幕府が各藩の財政余剰を懸念して大部の書を開板させ、抑圧しようとした政策の一環を反映したものか。或いは独自に加賀国学が計画したものか。一般にいずれとも定められてはいないが、

余りにも立派な覆刻出版であるので、加賀の富裕を誇るかのように見える。

八、又　薄葉刷　批入多　加賀国学蔵版印

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に「根本／通明」の陰刻円印がある。また、「金沢／相川／氏蔵」印もある。『周易』『書経』に博士の書き入れがある。

九、九部経解（九経解）　明郝敬撰　郝千秋、千石校　明萬曆年間刊（京山、郝氏）家刻

周易正解二十巻讀易一巻　萬曆四十三年刊
尚書辯解八巻讀書一巻
毛詩原解三十六巻読詩一巻　萬曆四十四年刊
春秋直解十五巻読春秋（巻十四、十五、春秋非左）　萬曆三十八（非左四十四）年刊
周礼完解十二巻讀周礼一巻　萬曆四十五年刊
儀礼節解十七巻読儀礼一巻　萬曆四十五年刊
礼記通解二十二巻読礼記一巻
論語詳解二十巻読論語、先聖遺事各一巻
孟子説解十四巻読孟子、孟子遺事各一巻　萬曆四十七年刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。「子龍」「根本／通明」（陰刻）「通／明」（陰刻）「書剣／自得」の印記もあり、博士の最も愛読されたものの一つである。古刀の蒐集考証も有名で、書と剣とが自ずから我が所蔵になると自慢している。竹紙の原刻明印本で、十行二十一字、匡郭内縦二十一・五横十三・六糎、白口、版心下に刻工名がある。首の「九部経解序」に大明萬曆四

十七年歳次己未孟夏郝敬自序があり、「己巳の冬に起草、甲寅の春に卒業、越大年己未、殺青ここに畢る」とある。郝敬は一五五八～一六三九、湖広京山の人。萬暦十七年の進士。本書の伝来は非常に稀である。『四庫全書』には『論語』以外の八種について、いずれも『存目』に著録するに止まっている。

一〇、又

尚書辯解十巻附尚書別解　明萬暦四十三年刊　家刻　批入多

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。博士の書き入れが頗る多い。

一一、**石斎先生経伝九種　明黄道周撰　清鄭肇校　清刊　覆刻　富岡鉄斎旧蔵**

孝経集伝四巻

易象正十二巻初二巻終二巻凡例目一巻　批入本

三易洞璣十六巻（宓図経緯三巻文図経偉三巻孔図経偉三巻雑図経緯三巻余図総経余図総緯一巻貞図経緯三巻）　批入本

洪範明義四巻

月令明義四巻

礼記集伝（表記二巻、坊記二巻、緇衣四巻、儒行二巻）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。各書の封面に「芥舟蔵版」とあり。康熙三十一・三十二年の鄭開極、また三十二年の張鵬翮の序がある。黄道周は一五八五～一六四六、福建漳浦の人。天啓二年の進士。『易象正』のみに書き入れがあり、「黄氏易説別是一種見解、本踏襲左氏所載蔡墨之説、遂陥于術数之末、不取象、不用十翼、是以、失易之本義…」等と書き入れがある。本版の字様は粗で、康熙刊本の覆刻と思われる。「鉄斎」の円印あり、封面に「居易書院蔵記」〈皇都富岡〉と墨書する。富岡鉄斎

（天保七～大正十三）の旧蔵書である。鉄斎は南画の大家であるが、善本の蒐集で「富岡文庫」は有名であった。現在は諸所に散在する。

一二、皇清経解　残存、数種伝来本補配　清阮元編　清道光九年刊咸豊十一年補刊

左伝杜解補正三巻　清顧炎武撰
毛詩稽古編　清陳啓源撰　杉原心斎旧蔵
郷党図考十巻　清江永撰
詩説三巻附録一巻巻　清惠周惕撰
湛園札記一巻　清姜宸英撰
易説六巻　清惠士奇撰
尚書小疏五巻　清沈彤撰
儀礼小疏五巻　同
四書攷異三十六巻　清翟灝撰
儀礼釈官九巻　清胡匡衷撰［詩説］以下到此補配原刻本無根本氏蔵印
詩経小学四巻　清段玉裁撰
尚書今古文注疏三十九巻　清孫星衍撰　批入本
問字堂集一巻
礼経釈例十三巻　清淩廷堪撰
校礼堂文集一巻　同

劉氏遺書一巻　清劉台拱撰
又
述学二巻　清汪中撰
経義知新記　同
疇人伝二巻　清阮元撰
揅経室集七巻　同
撫本礼記鄭注考異二巻　清張敦仁撰
又
易章句十巻　清焦循撰　批入本
又　批入本
易図略八巻　同
孟子正義三十巻　同　批入多
周易補疏二巻　同
尚書補疏二巻　同
毛詩補疏五巻　同
礼記補疏五巻　同
春秋左伝補疏三巻　同
論語補疏二巻　同
拜経文集一巻　清臧庸撰

瞥記一巻　清梁玉繩撰
経義述聞二十八巻　清王引之撰
虞氏易礼二巻　清張惠言撰
周易鄭氏義二巻　同
周易荀氏九家義一巻　同
左氏春秋考証二巻　清劉逢禄撰
箴膏盲評一巻　同
論語述何二巻　同
燕寝考三巻　清胡培翬撰
研六室雑著一巻　同
春秋異文箋六巻　清趙坦撰［燕寝考］以下到此補配原刻本無根本氏蔵印
吾亦廬稿四巻　清崔応榴撰
論語偶記一巻　清方観旭撰

清代を代表する経学の論文著作を集大成した叢書で、道光九年に広東の学海堂で出版され、太平天国の乱で一部版木が焼失し、咸豊十一年に再び焼板を刻して、重印した。初印本は少なく、伝存の殆どが補刊本である。版心の下部に「補刊」と刻されていないものは元の版木を用いている。根本博士の蔵書は残缺で、数種類の伝来本を取り合わせたもので、必要なものだけを購入していた。幕末の安井息軒以来、『皇清経解』は必読の書であったが、博士は必ずしも金科玉条とはしていない。大部分に「根本／氏蔵」印記がある。『易章句』『毛詩稽古編』『左伝杜解補正』『尚書今古文注疏』『孟子正義』等に主に博士の書き入れがある。『毛詩稽古編』は「緑静堂／図書章」があり、杉原心斎（幕府儒官）の旧蔵である。『左伝杜解補正』は本叢書の首冊で、この目次に博士の

朱点があり、所蔵本とそうでないものを点検している。

十一、叢書類（彙編）

一、十子全書　清王子興編　清嘉慶九年刊（姑蘇、聚文堂蔵版）　山田業広旧蔵

淮南子二十一巻（淮南子箋釈）　漢高誘注　清荘逵吉校

韓非子二十巻（韓非子評註）　明王世貞校　批入本

鶡冠子三巻（鶡冠子評註）　宋陸田注　明王宇等評　朱養和校

管子二十四巻（管子評註）　唐房玄齢注　劉績増注　明沈鼎新等評　朱養和校　批入本

荀子二十巻附校勘補遺　唐楊倞注　清謝墉校　覆刻清乾隆刊本　批入本

中説十巻（文中子箋釈）　題隋王通撰　宋阮逸注

新纂門目五臣音註揚子法言十巻（揚子箋釈）　漢揚雄撰　晋李軌・唐柳宗元・宋宋咸・呉秘・司馬光注

沖虚至徳真経八巻（列子箋釈）　晋張湛注

南華真経十巻　晋郭象注　唐陸徳明音義　批入多

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。他に「九折堂山田／氏図書之記」即ち山田業広の印記あり。外題は根本博士の筆。『鶡冠子』、『管子』の版心下に「花斎蔵版」とあり、聚文堂以前の蔵版を示すか。封面には全書に「重刊」とあり。蘇州の聚文堂は各種版木を求版して印刷している場合が多い。『荀子』、『中説』等の封面には「嘉慶甲子（九年）重鐫　姑蘇聚文堂蔵版」とある。求版した場合でもこうした封面にするものである。批入本というのが根本博士書き入れを指す。特に、『南華真経』の書き入れは綿密である。老子『道徳経』が欠ける。版式は『揚子法言』を例にとると、単辺有界十一行二十一字匡郭内縦十七・四横十三・三糎、粗黒口無魚尾である。

二、古文定本五巻（旁訓古文定本）闕名編　明末刊　小本

『周礼』『左伝』『公羊』『穀梁』『戦国策』『史記』『漢書』『後漢書』『唐宋八大家文』『歴朝文』に批点・標注を加えたもの。単辺有界七行十七字、単黒魚尾。匡郭内縦十・三横七糎。根本氏印なし。

三、漢魏叢書（封面）漢魏名文乗（序）漢魏六十名家（目録）明張運泰・余元熹編　明鍾惺等評　清刊　覆明（華文堂蔵版）

吳越春秋至荀公曾集、即名文乗、韓詩外伝至新語即漢魏叢書

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。西漢文二十三種、東漢文十六種、魏文二十二種、計六十一種。各書の首は「江陰沈鼎科弇江／豫章黄国琦五湖鑑定」「古譚張運泰来倩／余元熹延稺彙評」と題す。鑑定者は変化する。『韓詩外伝』以降は「明竟陵鐘惺評」と。首に閩書林張運泰の序と閩書林余元熹延稺の「文始篇」、壬午（萬暦十年か）孟夏日張来倩の「選例」を附す。封面に「竟陵鐘伯敬先生評／漢魏叢書／華文堂蔵版」と白紙に印刷する。単辺無界十行二十七字、句点圏点傍評を刻す。白口、版心下に巻数を刻す。匡郭内縦二十・七横十一・六糎。但し、『韓詩外伝』以降は、九行二十五字（縦二十横十一・八糎）版心下に巻数はない。従って、この部分は首の目録とも合致しないところがあり、補配の可能性もある。いずれにせよ、字様は粗、清の覆刻本であろう。

四、玉函山房輯佚書八十巻（含補編二巻）目耕帖三十一巻　闕第三冊　清馬国翰撰　清光緒九年長沙嫏嬛館刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。封面に「光緒九年癸／未長沙嫏嬛／館補校開彫」と木記がある。清末の紋紙を用い九行二十字、匡郭内縦十七・三横十一・八糎、左右双辺単魚尾、版心下に「嫏嬛館補校」とあり。字様は粗。馬国翰（一七九四～一八五七）は山東歴城の人。道光十二年の進士。本書は佚書の復元を目指す輯佚学の大著である。

五、雅雨堂蔵書　清盧見曾校　清乾隆二十一、二十五年刊

易伝十七巻（李氏易伝）　唐李鼎祚集解　批入多
経典釈文周易音義一巻（易釈文）　唐陸徳明撰　（鄭氏周易合冊）
鄭氏周易三巻　漢鄭玄撰　宋王應麟輯　清惠棟補
鄭司農集一巻　漢鄭玄撰
周易乾鑿度二巻　漢鄭玄注
尚書大伝四巻附補遺、続補遺、考異各一巻　漢伏勝撰　漢鄭玄注　清盧文弨補考　（前書合冊）
大戴礼記十三巻　漢戴徳撰　北周盧辯注
戦国策三十三巻　漢高誘注　批入本
匡謬正俗八巻　唐顔師古撰
摭言十五巻　南漢王定保撰
北夢瑣言二十巻　宋孫光憲撰
封氏聞見記十巻　唐封演撰
文昌雑録六巻附補遺一巻　宋龐元英撰　（鄭司農集合冊）

盧見曾（一六九〇～一七六八）は山東徳州の人。康熙六十年の進士。特に漢唐の訓詁学を重んじ、刻書も精刻で雅雨堂本は評価の高いテキストとされる。この叢書は一般に十三種類と言われ、『中国叢書綜録』では『経典釈文周易音義』を含まず、ここでは『周易爻辰図』（清惠棟撰）一種が欠けている。「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」「羽／嶽」の印記がある。他に「？文庫」の印が共通して捺されている。封面に「乾隆丙子鐫／雅雨堂蔵版」とある。盧氏の「乾隆丙子（二十一年）」の序（『大戴礼記』のみは乾隆戊寅の序で末に同じ校勘学者盧文弨の乾隆庚辰の跋）がある。うち、『易伝』は最も博士の愛読されたもので、書き入れは周

密である。『尚書大伝』は封面後印で、乾隆丙子の序、乾隆丁丑の跋がある。おしなべて、叢書は単行を集めて後印したケースが多く、本書もこの場合後印が殆どで、次掲の初印は、単行時のものであろうと想像される。

六、同　初印

易伝十七巻（李氏易伝）　唐李鼎祚集解

経典釈文周易音義一巻（易釈文）　唐陸徳明撰

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」「根本／通明」（陰刻）印記あり。また、「聖人復／起不易／吾言矣」印（博士のもの）あり。前掲のものの単行かと思われるが、二書同じ伝来なので、暫く叢書の一としてまとめておく。博士の書き入れがある。

七、西河合集（毛西河先生全集）　有闕　清毛奇齡撰　清嘉慶一年序刊（陸凝瑞堂）　批入本　補配本

推易始末四巻

仲氏易三十巻

河図洛書原舛編

太極図説遺議

易小帖五巻

春秋占筮書三巻

舜典補亡　以下補配鹿島清兵衛旧蔵同版本

国風省篇

毛詩写官記四巻

詩札二巻
詩伝詩説駁義五巻　闕巻二至五
尚書広聴録五巻
古文尚書冤詞八巻
周礼問二巻　以下別同版本補配
大学問
明堂問

毛奇齢は明末清初の学者で浙江蕭山の人。一六二三～一七一六。康熙の時博学鴻詞科に推挙される。封面（黄色）に「蕭山陸凝瑞堂蔵版」「凡経集五函五十一種共二百三十六巻、文集五函合六十六種共二百五十七巻」とある。乾隆三十五年陶杏秀の序、嘉慶一年の阮元の序あり。序によれば、毛氏生前より版刻の版木を陶氏の婿の陸氏が集め、補版して刻印したという。乾隆刊本の覆刻と思われる。『仲氏易』『春秋占筮書』『古文尚書冤詞』に博士の書き入れがある。「根本／氏蔵」印記あり。本書は三種類の伝来本を博士が取り合わせて使用したもので、特に、『古文尚書冤詞』は「雲煙家／蔵書記」印あり、鹿島清兵衛の旧蔵である。

十二、皆川淇園　著作

皆川淇園は享保十九～文化四（一七三四～一八〇七）年の生没で、名は愿、字は伯恭。京都の人。古注学の分類に属し、経学から文学に至るまで幅広い学問をなし、文字学・名物学等を基礎に各種注釈書『繹解』を著した。『易』に関しても独自の開物学を展開し、根本博士は愛読、淇園の著作全般を好んだようである。平戸・膳所・亀山の各藩に招かれた。弟子三千人と言われる。

一　易原二巻　寛政五年刊（京、菱屋孫兵衛）　批入本

「根本／氏蔵」印記あり。寛政五年河良顕の跋あり。末に五車楼菱屋の広告あり。本書は伝本が甚だ多い。

二　易学開物三巻　抄本

「根本／氏蔵」印記あり。黄色表紙。縦二十七・三横十八・七糎。題箋に「易学開物上（下）」と墨書。本文は、「易学開物巻之上／平安皆川愿著／…」と始まる。字面高さ約十九・五糎。無辺界。十行二十字尾題なし。寛政庚申の池維嘉の序語あり。折本の付録あり。静嘉堂文庫に版本がある。博士の書き入れは無い。

三　易原精義不分巻　抄本　図入本

「根本／氏蔵」印記あり。茶表紙。縦二十六・六横十八・八糎。題箋に「易原精義」と墨書。全部四冊で、第一冊は「時卦説・卦終説・七均説解」第二冊は「九籌説」、第三冊は「蓍列説」第四冊は「四象説・往来辞説」。単辺九行、匡郭内縦十八・八横十四・六糎上欄四・四糎の緑色また黄色の刷罫を用いる。版心単魚尾。尊経閣文庫に同書名の一冊あり、四冊本は他に無く、貴重である。

四　象式大意　抄本

「根本／氏蔵」印記あり。後補の表紙、縦二十三・二横十六・五糎、本文共紙の内表紙に「象式大意　全」と墨書。「象式大意／第一内外転開合」として本文へ。本文仮名交じり。第二「平上去入」以下、音、韻、既未、動静、遠近、開発収閉、清濁、呼名の次序に依るべし、開物呼法併釈、と十一まで。附に音記あり。左右双辺有界十行、匡郭内縦十九・五横十三糎の罫紙を用いる。静嘉堂文庫に写本あり。他に伝本を見ない。

五　易学階梯三巻　抄本

「根本／氏蔵」印記あり。本文共紙の表紙、縦二十三・五横十六・五糎。仮とじ。本文は「易学階梯巻之上／平安皆川愿伯恭口授男允筆録／…」と始まる。仮名交じり。無辺無界字面高さ約十七・五糎、通して一筆。二巻二冊の版本が多い。三巻三冊の写本は他に京都大学のみ。静嘉堂文庫は巻中のみを存す。

六　易学開物解　抄本（右同筆）

「根本／氏蔵」印記あり。『易学階梯』等と同筆の写本。本文共紙の表紙、縦二十四横十七・五糎。字面高さ約二十一糎。図表多数。国会図書館・尊経閣文庫に写本がある。

七　九籌合十二律説解　抄本

「根本／氏蔵」印記あり。縦二十七横十九糎の茶表紙に外題を墨書。単辺有界の刷り罫紙（縦二十一・一横十三・五糎）に十行で記す。版心単黒魚尾、丁付け六十七丁、全丁一筆。他に、静嘉堂文庫に存するのみ。

八　九籌説、九丘八索、周易十撰釈例各一巻　抄本　図入本

「根本／氏蔵」印記あり。浄書本。茶褐色表紙、縦二十六・五横十八・七糎。無辺界、十二行二十三字、字面高さ約二十・五糎。『九籌説』の末に「天明四年庚辰冬十月　平安皆川愿撰述」とあり。同様の伝本は他に無い。

九　淇園文集後編三巻　江戸時代刊　木活字印

四周双辺、八行十七字。円光寺の活字を用いて印刷されたもの。巻一の七、八行に墨格あり。比較的伝本は多い。この活字は、

徳川家康が足利学校の三要に命じ木活字を作らせ、出版活動を行わしめた際の活字であり、京都の伏見に学校をつくり、円光寺を建立、三要を住まわせたところから、この活字を用いた慶長頃の出版物を伏見版と呼んだ。『孔子家語』『貞観政要』『周易』等が有名である。皆川淇園はこの活字の残存せるものと不足分の新彫活字を用いた混合版で、本書以外にも数種出版している。詳細は川瀬一馬博士『古活字版之研究』（昭和四十二）の「徳川家康の開版事業」を参照。

一〇　蓍卜考誤辯正　抄本

根本氏印無し。左右双辺有界の刷り罫紙に十二行二十字で記す。単魚尾粗黒口、匡郭内縦十八横十三・二糎。宋朱熹の『蓍卜説』を考証したもの。自筆本が京都大学にある。

一一　同　抄本　批入本

「根本／氏蔵」印記あり。前書と同じもので書写者は異なる。縦二十七・二横十九糎の茶表紙を康熙綴じにしている。単辺有界十行の刷り罫紙、単魚尾白口、毎行二十字。匡郭内縦二十一横十三・六糎。句点あり。根本博士の外題、書き入れがある。

一二　周易繹解十五巻　田中大壯等校　江戸時代刊（京、菱屋孫兵衛）　巻七至十五抄本

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。国会図書館・京都大学に自筆本がある。刊本の末に五車楼の宣伝広告が六丁、奥付は菱屋等三都六肆、補写の部分は字面高さ約十九糎、十行二十字小字双行に記す部分と、十行単黒魚尾の刷り罫紙（縦十八・二横十三・九糎）を用いる部分とがある。いずれも訓点を附す。田中大壯は越前の儒者で津藩に仕える。皆川淇園の弟子である。

一三　書経繹解四巻　寛政十二年刊

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。書き入れが少々。十行二十字小字双行、匡郭内縦十八・四横十四糎。京都大学に自筆本がある。伝本は少ない。

一四　大学繹解附大学文脈分属図　中川僖校　江戸時代刊（有斐斎蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。

一五　論語繹解十巻　安永六年序刊　文化九年印（平戸藩楽歳堂蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。皆川淇園の安永の序あり。奥付は文化九年で、書肆は平安の北村、葛西、高橋の三肆。左の『孟子』と書き入れ旧蔵者を同じくする。根本氏書き入れは無い。

一六　孟子繹解十四巻　闕巻五、六　寛政九年刊（平戸藩楽歳堂蔵版）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。各巻首に平戸藩の印を刻す。根本氏では無い書き入れが多い。

一七　老子繹解二巻　寛政九年刊後印（京、天王寺屋市郎兵衛）　批入本

「根本／氏蔵」印記あり。寛政九年の富士谷成基の序あり。天王寺屋の奥付あり。根本博士書き入れ多し。

一八　名疇六巻　闕巻一、二　江戸時代刊（平戸藩楽歳堂蔵版）

「根本／氏蔵」印記あり。皆川氏の最も得意な名物学の書。奥付は天王寺屋で、平戸藩の出資で天王寺屋の売りさばきが皆川氏

の著作の主たる出版背景であった。書き入れは無い。

一九　問学挙要　安永三年刊（京、林伊兵衛、河南四郎右衛門）

根本氏印無し。奥付に安永三年京都の林・河南の二肆がある。その上に張り紙して京都の玉淵堂吉野屋甚助版と印刷してあるのは、後印の書肆か。「黒沢／氏図／書記」印あり。

十三、篤胤関係

一　神字日文伝並疑字篇　平田篤胤撰　佐藤信淵校（疑）平田銕胤校　文政二年跋刊　初印

「根本／氏蔵」印記あり。平田篤胤は安永五年～天保十四年。号は気吹之屋（いぶきのや）。秋田の人。国学者。独自の宗教観を背景に歴史を解釈し、国家神道を支える思想となった。秋田県立図書館には平田篤胤の遺書が所蔵され、本書の自筆稿本も含まれる。佐藤信淵は明和六年～嘉永三年、秋田の人。経世思想家と言われる。様々な実学を修め、篤胤に師事、経済や農業等に独自の論を展開した。やはり秋田県立図書館にその遺書が所蔵される。末に「伊吹廼屋先生及門人著述刻成之書目　塾蔵版」一葉あり。

二　太曞古易伝成文、古易大象経成文各一巻（古易成文）　平田篤胤撰　江戸後期刊　木邨嘉平刻字

「根本／氏蔵」印記あり。末に「彫工、東京神田小柳町　木邨嘉平房義」とあり。木邨嘉平は有名な刻工で、楊守敬の『古逸叢書』を刻して、その精美で中国人を驚かせた。青裳堂書店『日本書誌学大系』十三にその伝記がある。

三　西籍概論講本三巻　平田篤胤講　門人筆録　明治三年序刊（塾蔵版）

「根本／氏蔵」印記あり。末に「伊吹廼屋先生及門人著述刻成之書目　塾蔵版」一葉あり。

四　三易由来記二巻　平田篤胤撰　嘉永一年刊

「根本／氏蔵」印記あり。博士の朱の書き入れがある。末に「伊吹廼屋先生及門人著述刻成之書目　塾蔵版」一葉あり。

十四、自著類

一　三十六変揲策図　根本通明撰　写本（自筆）

根本氏印記無し。易の陰陽、策を整理説明したもの。本文共紙の表紙に外題を自書する。

二　三十六変筮法附左伝国語艮之八泰八筮法　写本（自筆）　附令写　明治三十年根本氏自序

根本氏印記無し。本文共紙の表紙、縦二十八横二十糎。外題自筆。明治三十年の次の自序が附される（令写で署名のみ自筆）。

余幼時専好程朱学、及長、読『通志堂経解』、自宋初至明初、群儒衆論悉備矣。及数四反覆、始悟其非也。見郝敬所著『九経解』、益明其非也。於是乎、更就『周易』『毛詩』『尚書』諸経之正文、而求其義、鑽堅研微、夜以日継。嘉永二年、始悟十有八変而成卦者、及三画小成之卦、而非六画大成之卦。思之思之者数年、簡練以成三十六変筮説。遂於乾卦、又悟天子一姓、世世以長子継宝位之象也。此二者、考諸経文而不謬矣。徴諸象義而不悖矣。聖人復起、不易吾言矣。然此皆先賢昔儒、所未嘗発也。口如虺、目如鸇、吹疵洗垢、故未敢軽言之。櫝而深蔵之。非求善賈而活之、今也、故旧門人求之迫迮、終不能辞焉。啓櫝而授之、然而狂瞽師心、唐突漢唐諸儒之罪、則擢髪難数。明治三十年三月　根本通明自叙

三　周易象義辨正三巻　闕巻一　根本通明撰　明治三十四年刊（撰者）

昭和十二年に鉛活版で再版されたが、そのもとになった原刻木版本。

四　羽嶽根本先生年譜　存巻上　根本通徳編　大久保鉄作校　電子複写明治三十四年刊本

原本を後に複写したもの。もともと前掲の『周易』と同時に附録として刻されたものであろう。原本には根本博士の自筆による補訂が加えられている。

十五、刀剣類

一　古刀押形　写本

縦二十五横十八糎の表紙。総計二十一丁の斐紙に刀の種類を図示す。末に寛永四年池田八左右衛門尉の奥書がある。また、元禄十五年三月吉日写之、とあり、以上は全て同筆である。また、弘化三年の所持者署名もある。

二　同　写本　有図　一冊

根本氏印無し。縦三十二横二十二・五糎の茶表紙。斐楮交漉紙に朱墨で書写する。特大。

三　秘伝古書刀鑑　闕名撰　天正十五年写

「根本／氏蔵」印記あり。外題は根本氏筆。末に天正十五年三月吉日　佐栖木禰太郎の署名あり。

四　古銘大秘録（刀剣古銘大秘録）　闕名者編　写本　薄葉

根本氏印無し。刀銘の由来を記したもの。

五　校正古刀銘鑑四巻　菅原長根撰　文政十三年春序刊

「根本／氏蔵」「根本／通明」（陰刻）「書剣自得」（根本氏印記）あり。博士の書き入れが頗る多い。書物と剣は二つながら博士の得意とするものであった。「東山吉光あり」等と博士所蔵の刀剣を記し、刀工・刀剣に甚だ造詣が深い。刀剣研究に資すべき按語が多い。

六　古刀銘尽大全九巻　菅原弘邦撰　寛政四年刊（江戸、田中汲古斎）有図

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。書き入れは無い。末に汲古堂蔵版書目あり。寛政四年の刊記、並びに京都の斉藤・勝村・今井の三書肆名を附す。

七　名物録並焼失名物録　闕名者編　写本　批入本　明治三十六年根本氏識語

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。剣の名物（名称学）の書である。次の博士自筆識語が首に附される。「蔵中宝秘／勇将河野通有太刀　腰刀副／粟田口藤四郎吉光作／少弐景資太刀／藤四郎吉光作　　通有景資二人弘安四年元寇の役、勇功儲軍に冠たり。其梗概を左に記す。明治三十六年六月　八十二翁根本通明」

八　本邦刀剣考　榊原香山撰　山本北山閲　寛政七年刊　同十年印（江戸、須原屋茂兵衛）

根本氏印無し。封面に寛政四年の刊記、奥付に寛政七年発兌・同十年求版、東武書林須原屋茂兵衛とあり。山本北山は秋田藩に迎えられた儒者。その序が首にある。四―四十二を参照。

九　刀剣録三巻附録二巻　青山佩弦斎撰　天保十三年跋刊　佩弦斎雑著巻二至四

「根本／氏蔵」印記あり。博士の書き入れあり。青山佩弦斎は青山延光（文化四～明治四）、水戸藩の儒者。彰考館教授。「佩」は「珮」にも作る。

一〇　臥遊軒刀剣辨論二巻　臥遊軒主人撰　默默斎校訂　嘉永四年刊（糸井氏蔵版）［大阪、河内屋喜兵衛・儀助］

根本氏印無し。封面に「糸井氏蔵版」刊記に嘉永四年発兌・取次人、河内屋とある。弘化四年の自序・嘉永一年の江木鰐水（福山藩儒医・文化七～明治十四）の序がある。

一一　（古今）刀剣辨疑三巻　水心子正秀撰　千本隆欽編　文化十四年跋刊（江戸、須原屋茂兵衛）

根本氏印無し。封面に「東都書肆千鐘房梓」奥付に「文化十三年、京都勝村、大阪秋田屋、江戸須原屋」とあり、文化十二年大田錦城の序、文化一年関根剛彦の序、文化十四年流彩子の跋あり。大田錦城は一―三十九を参照。

一二　古今鍛冶備考七巻　山田吉睦撰　江戸時代刊（龜峰館蔵版）

根本氏印無し。序・刊記その他無し。

一三　本朝鍛冶考十八巻首一冊　鎌田魚妙撰　寛政十二年刊（京、菊秀軒今井喜兵衛）

「根本／氏蔵」印記あり。博士の朱の書き入れがある。寛政八年鎌田氏の韻語あり。版心下に「水音舎蔵」とあり、末に菊秀軒菊屋喜兵衛蔵版目録あり。奥付に四書肆、江戸須原屋、大阪扇屋、京都勝村・今井がある。

十六、碑銘類

一　唐故通議大夫行薛王友柱国贈秘書少監国子祭酒太子少保顔君廟碑銘並序　唐顔真卿撰並書　清拓

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。三行五字。博士は顔真卿（七〇九～七八五）の書体を学び、筆跡は甚だ顔体に似る。外題に「家廟碑」と博士筆。

二　大元敕賜龍興寺大覚普慈広照無上帝師之碑　元趙孟頫撰並書　清拓

根本氏印無し。毎葉六行十六字、高さ二十三糎、「延祐三年十月立石」とあり。趙孟頫は元代の書家で一二五四～一三三二。

三　至宝斎法帖　宋黄庭堅書　影拓

根本氏印無し。黄庭堅は北宋の書家、一〇四五～一一〇五。拓本の影印。

四　漢大中大夫東方先生画贊碑　晋夏侯湛撰　唐顔真卿書　清拓

「根本／氏蔵」印記あり。毎葉二行四字、夏侯湛は西晋の才人。

十七、釈奠孔子類

一　釈奠儀　闕名編　写本（18／76）

「根本／氏蔵」印記あり。釈奠式として釈奠（孔子をお祭りする儀式）の次第を記したもの。博士の書き入れがある。

二　同　同　同（20／197）

根本氏印無し。内容は前書と同じ。折帖、大三切。

三　釈奠儀注　闕名編　写本（30／35）

根本氏印無し。釈奠（孔子をお祭りする儀式）の儀礼に関する著作。「礼楽疏釈奠儀注」「陳設目」「改訂儀注」「釈奠儀」「廟規」「改訂釈奠儀」からなる。

四　同　同　同（21／211）

「根本／氏蔵」印記あり。博士に書き入れがある。漢文で書かれる。「神位之図」等図七枚。前書と内容は異なる。半紙本。

五　同　根本通明編　写本（自筆稿本）（18／73）

根本氏印記無し。前書と内容は違うが、釈奠の礼法を説く。末に「明治二十三年五月、和田・大池・小野田福泉、諸子の為に造る。二十五日此の礼を行う。」と自筆の識語がある。

六　同　同　写本（一部自筆）（18／74）

根本氏印記無し。前書の浄書本。「明治二十三年五月二十五日始めて此の礼を行う。和田小次郎・大池九十郎・小野田福泉等掌儀を勤む。」と自筆の朱書あり。また、明治三十二年五月にも博士、根本通徳、岡本監輔等八十一人でこの儀式を執り行った旨も記される。

七　孔子聖蹟之図二巻　寛永七年刊（京、嘉休）　首有慶長十三年島津奥守藤原家久序、末有明弘治十年吉府重刊記

「根本／氏蔵」印記あり。他に「小野節／家蔵書」（人見竹洞）印あり。明正統九年張楷の序あり。末に明弘治十年吉府重刊の跋を附す。吉府は明の皇子朱見浚が長沙に成化十三年（一四七七）に建てた藩府で、『四書集注』等の出版を行った。また、首に日本の慶長十三年島津家久の序があり、明の弘治年間に正統本を重刊したものを、日本で寛永七年に覆刻したものである。附訓本。版心は双花口魚尾で匡郭は縦二十一・九横十六・二糎。『聖蹟図』は、孔子の生涯を図にしたもので日本では本版が最も古い。中国では儒学の盛んであった明の藩府で出版されたものが遺っているが、多くはない。

八　聖廟祀典図攷五巻首一巻附聖蹟図・孟子聖蹟図各一巻　清顧沅編　清道光六年刊（呉、顧氏賜硯堂）

「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。首に御製の序があり、朱印。顧沅は道光間、蘇州の蔵書家で、蔵書楼「藝海楼」には稀本善本が多かったと伝えられる。類書に『古聖賢像伝略』（道光刊本）がある。『賜硯堂叢書』を編纂出版した。

九　孔子正学龍園正名録四巻並附録（正名録）　座光寺南屏撰　小池益等校　寛政十一年刊（座光寺三蔵蔵版）

根本氏印無し。座光寺南屏は甲斐の儒者、享保二十年から文政一年。龍園はその号。末に龍園著述書目あり。奥付に江戸足利屋勘六の書肆名あり。

十八、雑類

一　（地理風水）家相新編三巻　尾島碩聞撰　明治三十四年刊（東京、礫川堂尾島碩宥）　有根本氏題辞　有図

根本氏印記無し。半紙本。

二　儀礼儀法会要　平元謙斎撰　写本

根本氏印記無し。縦二十三・五横十六・五糎、本文共紙表紙に「天保十四年脱稿」と墨書。全丁一筆。無辺界、十三行二十字内外。字面高さ約十九・五糎。朱の圏点あり。浄書前の稿本か。平元謙斎は根本博士の弟子である。

三　祭器図式二巻　井上敬治撰　写本（自筆？）　有図

根本氏印記無し。縹色表紙、縦二十二横十六糎、享保九年の自序あり。表紙裏に「享保甲辰首夏改定／橘山主人祭服新営／深衣裁縫制記／井上敬治和衷　考撰」とある。字面高さ約二十糎。全部一手。自筆稿本か。『国書総目録』に未著録。半紙本で合冊している。内容は、深衣裁縫制記、分合主凹凸版図編、祭礼椅卓器図、霊座備物定品図、正寝祭器籍、からなる。

四　笠儀一巻並附録　闕名撰　写本

「根本／氏蔵」印記あり。占いに関する説で、稿本。朱墨の訂正も加える。十二行二十二字、仮名交じり。外題は根本博士筆。博士の著作であろうか。

五　八陣図説二巻　山脇重顕撰　寛文七年序刊後印（京、出雲寺和泉掾）

根本氏印無し。古来兵法の八つの陣構えについて述べたもの。山脇重顕は江戸前期の山崎闇斎学派の人。『分類補注李太白詩』に訓点を施している。序末に「大和屋伊兵衛板」とあり、出雲寺の奥付がある。

六　伏敵編六巻附靖方溯源二巻、竹崎季長蒙古襲來絵詞　山田安栄編　重野成斎監修　明治二十四年刊　同二十五年訂正印（東京、吉川半七）　絵詞銅版　B5

根本氏印無し。書き入れ少々。十五―七『名物録』に博士が記す二名の伝記は本書に依っている。重野成斎については五―二十八等を参照。

七　本朝画史五巻並本朝画印一冊　狩野永納撰　江戸時代刊明治三十三年印（東京、文永堂武田伝右衛門・尚栄堂小川寅松）

根本氏印無し。書き入れ少々。奥付に求版とあり、江戸中期の版木を用いている。版木の摩滅が多い。日本の画史を通覧した最初のもの。元禄時代に出版された。父の山雪の遺稿を永納が集成したもの。

八　如不及斎別号録四十八巻序目一冊　鈴木汪等編　文政十年刊（秋田藩明徳館）

「根本／氏蔵」「根本／通明」（陰刻）「子／龍」印あり。鈴木汪は五―二十五を参照。扉の文政丁亥（十年）、明徳館蔵とあり。文政八年の白河楽翁（松平定信）の序あり。また文化十三年の秋田藩儒源之熙の序がある。鈴木汪等七名の編集、四名の校訂者からなる。漢魏以来、明代に至る人名の別号索引で、現代中国でもよく編纂されるものの先駆けである。刻字（村千秋刻とある）、紙質も瀟洒で縦長の唐本に似せた体裁は実に美しい出版物であると同時に甚だ便利な書物である。秋田藩の学問を物語る名品である。

九　古語拾遺　斎部広成撰　元録九年跋刊　文化四年印（大坂、河内屋喜兵衛）

「根本／子龍／図書」印記あり。斎部広成は八～九世紀の人。八〇七年に本書を著す。日本の古代の伝説等を集めて自説をも交えた歴史乃至は神道の書。元禄九年の大伴重堅の跋文があり、大阪の河内屋の「文化四年求版」の入木がある。更に奥付は十二名

の書肆が名を連ねる。

一〇　和漢年契附索引　高安蘆屋撰　荒井鳴門補　安政二年刊（大坂、葛城宜英堂）　根本氏愛用批入頗多

「根本／氏蔵」「根本／通明」（陰刻）「書剣自得」（根本氏印記）あり。博士の自伝や画人・刀工・学者等の年譜も書き入れ、甚だ重要な愛用書である。封面に宜英堂蔵とあり。寛政九年に高安蘆屋が撰し、文化二年に改正、同十三年に荒井鳴門が補い、天保二年に再版、その後安政二年に増補大成として重版した。刊記には大阪の伊丹屋・奈良屋が連盟となっている。奥付は江戸七書肆、京都二書肆となっている。本書は版種が多く、その異同の同定はかなり困難である。荒井鳴門は安永四～嘉永六、阿波の人。林述斎に師事、『五経』の校訂等も行っている。淀藩儒。

一一　改正三河後風土記四十二巻首一冊　成島潤園撰　安政五年写

根本氏印無し。成島潤園（東岳）は代々幕府の儒官であった成島家の幕末の当主で、成島柳北はその孫である。天保三年の自序がある。末に「安政五年九月認　行年七十一翁　尚友」と本文同筆で記す。尚友が誰かは不明。潤園は文久二年に八十五才で亡くなっている。『三河後風土記』は日本の上古中世を描いた歴史書であるが、本書はそれを幕命により潤園が改正したもの。

一二　深州風土記　存巻六至十八　闕名撰　刊本

根本氏印無し。版式は双辺有界十行二十二字、匡郭縦十六・一横十二糎。

第一編の訂正

一―二、「後修」を削除

一―二十三、十―七に移動

一―三十九、「江戸時代写」を追加

一―四十、十三―四に移動

二―十五、「王氏」を「汪氏」に訂正

二―十七、十―十二に移動

二―二十三、「注」を「撰」に訂正

三―三、「出雲寺万次郎」の下に括弧を加える

三―十五、「姜我英」を「姜文灼」に訂正

四―二十、「宝暦九年刊」を「寛延二年刊宝暦九年印」に訂正

四―二十九、「乾隆二年」を「乾隆二十三年」に訂正

四―五十八、「左転」を「左伝」に訂正

五―十五、「天明七年刊後印」を「天明七年印」に訂正

五―二十一、「七巻」を「十巻」に「知不足斎」を「後知不足斎」に訂正

七―八、「太元」を「太玄」に訂正

八―三、「松栄堂」を「宋栄堂」に訂正

十二―十五、「刊」を「序刊」に訂正

十三―二、全項目を削除
十三―四、十三―二に移動
十三―四、一―四十を移動
十五―十二、「治」を「冶」に訂正
十五―十三、「治」を「冶」に訂正
十七―七、「細野要斎」を削除
十七―八、「顧沅湘」を「顧沅」に訂正
十七―九、「龍図」を「龍園」に訂正
十八―九、「元禄九年跋刊」を「元禄九年跋刊文化四年印」に訂正
十八―十二、「清刊」を「刊本」に訂正